
カシューナッツはお好きでしょうか？

たこき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カシューナッツはお好きでしょうか？

【NZコード】

N6779X

【作者名】

たこわ

【あらすじ】

アイドルを題材とした物語です。

アイドルをプロデュースする老け顔の男『ふけさん』。

アイドルを目指す少女『カエテ』。

新人アイドル『ハルカ』。

アイドルに恋する警察官『川島』。

そして、謎の『アイドル研究家』。

この5人がおりなす恋物語……にする予定です。

各話ごとに主人公が変わる形式で書いています。
ぜひ、読んでやってください。

プロローグ

～プロローグ～

私には、変な癖がある。

『ひついたら、どうなるだひつへ。』

と変なことを思いつき、それを実行したくなる。実行したくなるだけならまだいいのだが、どうやら私にはそのどうでもいい思い付きを実現させてしまう、驚異的な行動力も備わっているらしかった。

普段は全く行動力がなく、ダメな私だが、変な思い付きを実現させることに関してだけ、何故かものすごい行動力を発揮するのだ。その行動力のせいで、四・五回警察の「厄介になつたことがあるほどだ。ご厄介といつても、痴漢をしたり、暴力行為を行つたりはしていない。断じてしていない。ただ、少し迷惑な行為をしただけ、ただそれだけなのに、無能な警察どもは私のことを変人扱いした。許せない！　國家の犬め！　税金返せ！　……これ以上無意味な発狂はやめて、物語を進めることにしましょう。

さあお楽しみ、これから始まる物語はきっと、あなたの脳髄に一滴として残らないでしょう。読んだあと「読まなきやよかつたあ！　！　時間返せ！　！」と後悔することでしょう。えてして、人生とはそういうものです。よく、「無駄なことにこそ意味があるんだ」という詭弁を耳にしますが、そんなことありません。無駄なものは無駄です。意味などありません。意味など求めている時点で負けです。……ん？　話が長いって？　わかりました、でわ、今度こそ話

を進めまい。といふ。

1・ふけさん（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

1・ふけさん

今日もまた、ぶらりとオフィス街を歩いていると、ある建物に目がとまた。その建物はいわゆる『貸しスタジオ』として使われている建物であった。私は何の気なしにその建物に入った。

今年で二十八になる、超老け顔の私。昔から老け顔で、中一の時についたあだ名が『ふけさん』な私。見た感じ、五十歳くらいのおっさんにしか見えない私。……そんな私が勝手に建物に入つて、呼び止められないわけがない。

「どうやら様ですか？」

当然のように私は呼び止められた。

「社長です」

私は堂々と、歯切れよく答えた。今までの経験から言つて、こういつ場合はずっとしてはいたまうがかえつて怪しまれないものだ。

「じゃ、社長ですか！？」

「うむ。そうだよ。何だね、ここの人間は社長の顔もわからないのかね？」

私は相手の言葉にかぶせる様に、少し威圧的な態度で言った。

「そ、そんなことはありません。ちゃんと知っていますよ。まさかいらっしゃるとは思つていなかつたので。来る前に連絡していただ

ければよかつたのに。でも、どうせ。オーディション会場は『あります』

完全に私を社長だと思い込んだ若い男性は少し早口でそう言つと、『オーディション会場』なるとこに私を案内してくれた。

はて？ オーディションとは？ いつたい何の？

私はそんなことを考えながら若い男性の後に続いてオーディション会場へと足を踏み入れた。

2・ふけさん

オーディション会場には十人ほどのスタッフらしき大人達と、おそらくオーディションを受けに来たであろう若い二十人ほどの少女達がいた。

「次、エントリーナンバー十一番の子」

「栗山カエラ、18歳です。よろしくお願ひします!」

「君はどんなアイドルになりたいの?」

「はい! 私は歌やダンスのレッスンをがんばって、一生懸命努力して、歌って踊れる一流アイドルになりたいです!」

「へえー、そう。じゃあ、今までどんな努力をしてきたの?」

「はい、アイドルになるために、毎日四時間のダンスや歌のレッスンをしてきました」

どうやら審査の真っ最中らしく、まだ垢抜けていないアイドルの卵が必死になつて自己主張をしていた。

「おせーよおまえ!」
「すいません」

私のことを案内してくれた若い男性が、おせらべーの中で一番偉

いと思われるハゲ頭の男性のもとへと向かい、何やら話し始めた。

「……で、ちやんと準備できたのか？」

「いえ、すいません。まだです」

「はあ？ お前なめてんの？」

ハゲさんは相当イラついているらしく、言葉の抑揚が暴力的だつた。ハゲさんのイラついた雰囲気が狭い会場に充満していく、幼いアイドルの卵達はとても息苦しそうだった。かわいそつ。

「それが、社長が来たので、それぢこりじやなかつたんです

「え！？ 社長？ うそ？ ビニにいるの？」

ハゲさんはしきりにキヨロキヨロしていた。……マズイ、さすがにハゲさんくらい偉い人であれば本当の社長の顔ぐらい知つていてどう。ばれる前に逃げようか……。私がそんなことを考えていると

「あひひりです」

と、案内してくれた若い男性に指を刺された。マズイ、非常にマズイ……。

「そうです。私が社長です。オーディションは順調ですか？」

思わず、そんな言葉が口から出ってきた。

「……」

ハゲさんが黙り込んだ。私のことを疑つていいのだろうか？ くそ、万事休すか……。私がまた警察の厄介になる覚悟を決めたとき、ハゲさんが勢いよく近づいてきた。

「いやー、社長お久しぶりです！ どうです？ 今夜あたりまた呑みに行きましょうよ」

……おい！ ハゲさん、あんたそれでいいのか！？

「そうしたいのはやめやめなんだけどね、もう帰らなくちゃいけないんだ」

私は自分が一セ社長であることがばれる前に退散しようと思ひ、話を早く切り上げようとした。四、五回警察の「厄介になつた経験で学んだことは『深追いをしない』『腹八分目でやめる』といつことだ。そう思った私が、帰らうと方向転換をしようとしたとき、

「そうだ、社長から一言お願いしますよ」

とハゲさんに言われ、手を引かれ、まだあどけないアイドルの卵達の前に立たされ、スピーチをする羽田になつた。

もう一度確認しておきますが、私は今年で二十八歳になる、少し老けた顔をした、ただの公務員です。全くの部外者です。

さて、何を言おつか……。私は黙つたままでは怪しまれると思い、苦心しながらも言葉を探し、口を開いた。

3・ふけさん

「さつさんの十一番の子。君はアイドル失格だね」

少し、キツめのトーンで、私は言葉を発した。十一番の少女は少し動搖した顔をしていたが、目は反抗的だつた。

十一番の少女を槍玉に挙げたのは、ただ単に話の内容が思いつかなかつたから。ただそれだけ。「ごめんね、十一番の子。

「どうしてですか？一生懸命努力して、一流のアイドルになりたい。この気持ちのどこがいけないのでですか？」

十一番の少女は臆することなく社長（一セモノだけど）にたてついた。これは、若さがなせる技だなあ……。若いころは私にも変な自信があつて、周りの人の言葉なんか、素直に聞く気になれなかつたもんなあ。うんうん……つてかマズイ！予想以上に食いついてきた。どうにかこの子を落ち着かせないと……

「いいですか、アイドルというのは人に『憩い』を届ける仕事です。努力をするということは、無理をすることです。無理をしている人が、誰かに『憩い』を届けられますか？努力するのに夢中で、心に余裕のない人が、いつたい何を伝えられというのでしょうか？」

テキトウです。私、今ものすゞくテキトウなこと言つています。

十一番のお嬢さん、これで引き下がつてくれません？

「……でも、毎日レッスンしないと歌もダンスも覚えられません。

うまくなりません。へたくそなままじゃ評価してもらえないから努力は必要だと思います。絶対に」

十一番の少女は「絶対に」と力強く語尾を結んだ。おいおい、最近の子はどんだけすごいんだよ。仮にも社長だよ？ 社長に対しこれだけ強気でモノを言えるなんて……。若さって「ワイヤ。

「大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ。一流のスポーツ選手ほど、努力をしていないと言う。それは、努力を隠したいからそういう言っているわけじゃないで、本当にそう思っているからなんだ。

つまり、何を言いたいかというとだね、他の人から見たらスゴイ努力しているように見えても、その人にとっては日常のことであり、努力をしているという自覚がないということなんだ。だから、余裕をもてる。無理をしていないから、一流のパフォーマンスを披露できる。

アイドルもそう。僕らが歯を磨くように、毎日四時間の激しいレッスンを平然とこなす。レッスンの後に『疲れたー』とか『自分は努力した』なんて思わない。だって毎日の食事と同じ、ただの日常の一部でしかないんだから。そういう気持ちで淡々と激しいレッスンをこなす。そして、心に余裕を持つて、自身を表現する。それができて初めて、『一流のアイドル』になれるんだよ。

今の君は無理して努力して、心に余裕がないんじゃないかな？ それじゃ、ダメだよ。普通の人じゃ耐えられないような激しいレッスンを、涼しい顔で平然とこなす。それができて初めて、心に余裕が生まれ、人に『懇意』を届けることができるんだよ

「テキトウです。ああ、テキトウです。自分でもなに言つてこるか
わかりませーん。

「…………すこませんでした」

「…………すこませんでした」
じゅらじゅら十一番の少女はあきらめてくれたようだった。ありがとう
う、君はきっと将来すばらしくアイドルになるよ。そのときは、影
ながら応援するからね。それじゃ！

「でわ、みんなわんわよつなり。オーディションを続けてください」

私は自分が二セ社長であることがばれる前にそそくそと退散した。

『大切なのは、君が『いつ努力を何でもない日常に変える』ことだよ』

突如オーディション会場に現れた社長さんのこの言葉を聞いて、私は本気でアイドルを目指そうと思った。

最初は友達が「一緒にオーディションを受けてほしい」と泣いて頼んできたので、仕方ない気持ちでオーディションを受けに行つた。テキトウに答えて、さつさと落選して帰るうつ思つていた。でも、突如現れた社長さんの言葉で、アイドルという職業に興味を持つた。『憩いを届ける仕事』という言葉にグッときた。アイドルになりたいと思つた。

「ハルカさん、スタンバイお願ひします」

「あ、はい！」

あのとき、自分のオーディション番号が十五番で良かつた。十二番よりもはやい番号だったら、きっと私はアイドル『カシュー・ナッシュ』のメンバーに選ばれなかつたと思つ。

そんなことを考えながら、私は眩いステージにつながる階段を、駆け上がつた。

5・アイドル研究家

アイドル『カシュー・ナツツ』

つい最近デビューしたばかりの新米アイドルだ。デビュー曲は『カシュー・ナツツはお好きですか?』。オリコン初登場5位はなかなかの結果といえるだろう。所属はアイドルプロダクション『わっしょい』。

メンバーは、ハルカ、クミ、マリコの3人。いわゆる、“王道アイドル”といえる様な風貌や雰囲気を携えた3人組みである。

しかし、歌やダンスのレベルは高く、そのパフォーマンスはショート呼べるレベルにある。特にハルカは身長こそ低いが、ダンスのキレと歌唱力が秀でている。それに顔も愛嬌のある、誰にも親しまれるような顔をしている。

今後、大ブレイク間違いなしの注目アイドルであると太鼓判を押せる、数少ないアイドルであろう。

6・警察官川島（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが。ご了承ください。

「またお前か！ 人の迷惑を考えるー。」

「これで7回目だ……。いつたまにこの男は何をしたいんだー？ さっぱりわからん。」

俺はこの町で有名な変人である”田中敬一”といつ男を再び捕らえた。この男、まだ28歳にもかかわらず、とても老けた顔をしている。そのため、交番内では「変なおじさん」と呼ばれている。

「離せ！ 国家の犬め！ ハンチクショウウー！」

この男は今回、道行く人にいきなりジャンケンを仕掛けるという奇行をしていた。何が楽しくてそんなことするのかわからんが、苦情の電話が殺到したので、この町の交番で一番下つ端の俺が注意にきたのだ。正確には行かされたのだ。いつもそう、酔っ払いとか不良の喧嘩とかそういうた面倒くさいことは全て俺が処理する羽目になる……。ああ、はやく後輩こないかなあ。ハキつかつてやるのー。

「ほら！ いいかげんおとなしくしりー とつあえず交番に行くぞ」

俺は抵抗する変なおじさんを羽交い絞めにし、無理やり交番に連れて行こつとした。そのとおり、

「社長さんー。」

俺は思わず腕の力を緩め、変なおじさんを放してしまった。俺の目の前にはあの、アイドル『カシュー・ナツ』のハルカちゃんがいたのだ！！ か、か、か、かわいい！！！ かわいすぎる……。

俺は思わずハルカちゃんに見惚れてしまった。

「社長さん、私、私ずっと、あなたにもう一度あいたかったんです……こんな街中で偶然あえるなんて、うれしいです」

はにかむ様に微笑むハルカちゃん。もう、かわいすぎです。俺の心臓はバクバクだった。

「待つてくださいー 社長さんー！」

ハルカちゃんは艶のある髪をなびかせながら、俺の横を走り抜けていった。そのとき、ほのかに漂うシャンプーの香りが鼻腔を通り抜け、俺はまるで夢の中にいるような浮遊感を味わった。ああ、なんていい香りなんだ……。俺は浮遊感を楽しみながら、走り去つて行く彼女の後姿を見送った。

パタパタと揺らめくスカートから伸びる、白くて細い足。ギュッと抱きしめたら折れてしまうのではないかと思えるほど、華奢な背。そして、そんな彼女の目線の先には……変なおじさん？ はて？ どういうことだ？ そういうえば「社長さん」ってハルカちゃんが言っていたような……。

俺は次々と浮かんでくる疑問をもてあましながら、美しい少女の背中を見送った。

7・ふけさん

「はあー、はあー……」

私は人気のない浜辺へと逃げ込み、警察が追つて来ていないので確認してから一息ついた。

「ふあー、災難だった。くそ、あの警察毎回私のことを捕まえにきやがる！ 私はただ、町行く人にじゃんけんを仕掛けただけなのに、なんで警察に注意されなければいけないんだ！ コンチクショウ！ ……はあ、疲れた」

私は浜辺に寝そべり、上空を見上げて休んだ。

ふあああ……少し寝るか。私がそう、思ったとき

「ララララ～」

テトラポッドの向こう側から、謎の歌声が聞こえてきた。それは、心地よい波の音を搔き消すような、大きな歌声だった。

いつたい誰だ！？ つるさくて眠れないじゃないか！ そう思つた私は文句の一つでも言つてやろうと思つて、テトラポッドの向こう側を覗き込んだ。

「ルルルルル～」

そこには、一人の少女がいた。相手が強そうな男だつたらどうしようかと思つたが、か弱そうな少女なら話は別だ。強氣で文句を言

つてやるわ。そう思つたとき、ある考えが浮かんだ。

『「」の少女の歌声にあわせて、ぱれないよつてハモる』ことができたら、おもしろそうだ

やう思つてしまつた。そして、一度やう思つてしまつたら実行せずにはいられないのが私の性分だ。私は「ゴホン」と軽く喉を鳴らして、少女の歌声に合わせるように、白艶の美声を発した。

「ララララ～」

「ララララ～」

「ルルルル～」

「ルルルル～」

ふふふ、さすが私だ。あの少女、全然気付いていないぞ。

「ロロロロロ～」

「ロロロロロ……ロ？」

異変に気付いたときにはもう、遅かった。私の目の前には、硬く握られたコブシが迫っていた。

「ハグう！～！」

私の目の前は、真っ暗になった。

「サイテー…… わたさん、あんた何者!…? マジ気持ち悪いんで
すけど」

私は一人で発声練習をしてるときに、急にハモって来た氣色悪い
おっさんをぶん殴った。おっさんは「ハグぅ!…!…」と意味の悪
い奇声をあげて、その場に倒れた。

「わざと酷いな。私はまだ28歳の青年だ」

おっさんは頭を抱えながら、ゆっくりと起き上がった。……この
おっさん、どこかで見たことあるような……。私はおっさんの顔を
マジマジと見つめた。私は記憶の中からこのおっさんの顔を捲した。
あと少しで思い出せそうなんだけ……。

私はこのおっさんが誰なのかを思い出すひつゝ、おっさんにはづき、
わざとマジマジと顔を見つめた。

「ああ…… 思い出したあああ……」

私がわづ、叫んだときも。おっさんと私の唇が触れ合った。

「はあー……、やつと、追いついた……」

私は社長さんの後を必死に追いかけて、よつやく浜辺にいる社長さんに追いついた。私はこの胸の中にある感情を社長さんに伝えたくて、呼吸を整えながら言葉を考えた。

社長さんのおかげでアイドルという仕事を好きになれたことを、感謝したい。社長さんとの出会いが私にとつてかけがえのないものだつたと、知つてほしい。そして、うまく表現できないこの胸のドキドキを伝えたい！

「よしー。」

私は呼吸と気持ちを整えて、社長さんのいるテラトープシードの向こう側を覗き込んだ。

「…………ザザア…………」

美しい波の音。唇を重ねあう男女。やけに速く鼓動する心臓。何故か零れ落ちる涙……

気がつくと私は、海と反対方向に走り出していた。

私に重いコブシをあびせた少女は、何故かマジマジと私の顔を見てきた。そして、私に顔を近づけてきた。……これはまさか！？「キスして欲しい」のサインではなかろうか……ここは男としてはずすわけにはいかない！

そう思った私は少女の唇に白らの唇を押し当てた。

……もう少し美しい表現のできる接吻をしたかったが、こういった経験の少ない私では、衝突事故のようなキスが限界だった。

「おひあ……！ てめえ、このやつ！」

衝突事故のようなキスのあとにやつてきたのは、少女の甘い言葉ではなく、まさに衝突事故のようなコブシだった。

「はぐううーーー！」

私は後方に吹き飛ばされ、テトラポッドに頭蓋骨を打ちつけた。

「あんた……私から夢だけじゃなくて、ファーストキスまで奪いやがつて！ 社長かなんだか知らないけど、少し偉いからって、人の大事なもの奪つていいわけ！？ ほんとサイテーーーー！」

「コブシの嵐が私を襲う。蹴りの嵐も。そして、そんなコブシと蹴りの嵐の中、冷たい雨が降つてきた。

「これは暴風雨になつたわつだ」

私は、まるで滝のよつよつぼつたんぼつたんとたれ落ちる少女の涙を見ながら、そんなことを考えていた。

「オラオラオラオラオラーー。」

おっさんを殴つていると、少し気が晴れた。ここ最近、オーディションとこうオーディションに落ちまくつり、少し気持ちが落ち込んでいた。

2ヶ月ほど前に受けたアイドル『カシユーナツ』のオーディションでは、このおっさん社長に邪魔されて落選した。この落選を機に、私は調子を崩し、その後に受けたアイドルオーディションでは1次、2次審査での落選が続いた。

最初のこりは落選しても「こんなに魅力的な私を落とすなんて！なんて見る目はないやつらだ！」と強気でいられた。でも、さすがに50回近くオーディションで落とされると、自分はアイドルとしての素質がないのではないかと、かなり気持ちが落ち込んでいた。

「くそ！ 社長なんだ！ このやうう！」

私はここ最近オーディションで落とされたのは、この社長が元凶のような気がしてきて、さらに激しくおっさん社長をぶん殴つた。

「ま、まつてくれー わ、私は社長じゃないんだ！」

私は思わず口笛を止めた。社長じゃない？ どうこうひとへ。私の思考は停止した。

「ま、まつてくれ！ わ、私は社長じゃないんだ！」

生命の危険を感じた私は、自分が社長ではないことを正直に話し、謝罪することを決意した。私の誠実な思いが届いたらしく、少女は嵐のような「ブシ」を抑えてくれた。

「社長じゃないって……じゃあ、あんた誰？」

「申し送れました。私、田中敬一と申します。皆さんはよく『ふけさん』と呼ばれます。ご覧のとおり、私としても老けた顔をしておりまして、それでふけさんと呼ばれています。あ、これでもまだ28歳なんですよ。驚きました？」

「うそ！？ 28歳？ ふけさん？ いや、だから……えっと、あんた、あの芸能プロダクションとは関係のない人なの？」

「はい、そうです。私の町の市役所で働いてる、公務員です」
「います」

「……じゃあ、何で社長だつて嘘をついて、あのオープニング会場に潜入したの？」

「おもしろいからだったからです」

「……じゃあ、なんであるのオープニングのとき、私を槍玉に挙げて、責めるような発言をしたの？」

「それは……」

私は思わず返答に困った。返答しだいでは、殺される。そう思えるほど、彼女の目は鋭く私の瞳を睨んでいた。私は少女の怒りが少しでも収まるような回答を必死で考えた。

「き、君以外の人が、目に入らなかつたからです」

ふけさんはオドオドとした表情で、あからさまな嘘をついた。

「ふ、ふははは…」

私は思わず笑つてしまつた。ああ、この人はなんて嘘をつくのが
へたくそなんだらう。そう思つと、何だか怒る氣も失せ、何もかも
がどうでもよく思えてきた。

「ふけさん、あんた金持つてゐる?」

「あ、ははい。それなりに。一応社会人なので……」

「よしー。それじゃ、行くよ…」

「え? ええ?」

私はキヨトンとしているふけさんの手をとり、繁華街へと向かつた。

社長さんのキスシーンを見た私は、無我夢中で街中を走った。

「もげえ！」

そして、こけた。

「イテテテ……」

膝を大きくすりむいた。真紅の血が滲んでいる。痛い……

לען עליון

痛みを感じた瞬間、瞳から滝のように涙が溢れてきた。

私
なにや二てんだろ二

一 大丈夫ですか？

ふと、声のする方を見上げると、目の前には警察官がいた。私は泣き顔を見られたくなかったので、必死に痛みと涙を堪え、笑顔で答えた。

「大丈夫です。おかげでなく」

私は直ぐに身を翻し、警察官から離れようとした。

「ちよ、ちよっとまって！ も、君はあの社長と会いたいんだろ？」

私の足が止まつた。

「俺、あ、あの社長と知り合いなんだよ……だから……そ、そりだ！ これ、これ俺の連絡先。もし、社長に会いたいんだつたら連絡して！」

そう言つと、警察官は拳銃不審な動きで私に紙切れを渡して去つて行つた。社長さん……もう一度、会える？ 私の胸は少し、ときめいた。

15・ふけさん（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

「あのカーネさん? もしかして、それ全部買つんだですか?」

カーネと名乗る少女は、買い物カゴに服や雑貨をどんどん入れて行く。

「当然よ

「お金は……」

「は? あんたが払うに決まってるでしょ」

「でも……」

「何? あんた私のような可憐な少女の夢とファーストキスを奪つておいて、何様のつもり?」

「……申し訳ありません」

「ほんとうなら、警察に行つてもいいんだよ? 『変態に襲われました!』って泣きながら交番に駆け込んであげようか?」

「……勘弁してください」

「これでチャラにしてあげようつていつ私の寛大な心に感謝しない。あ! これもかわいい。買っちゃおうと!」

「.....グスン（涙）」

私は涙をこらえながら、少女のショッピングに付き合つた。

ショッピング、ランチ、ボーリング、スイーツ、ゲームセンター。私は日ごろの鬱憤を晴らすように、ふけさんを連れて遊び歩いた。当然、お金は全てふけさんに払わせた。

「次はカラオケよ！」

「すいません……お金が……」

「やう？ ジャあ、ショウがないわね」

「あきらめてくれるんですか？」

「銀行に行つてから、カラオケに行きましょう」

「……はー」

ふけさんは酷く落ち込んだ表情で銀行へ向かった。

「わーと、まずは何から歌おうかな？」

ふけさんの財布が少しふくらみをとつもどしてから、私達はカラオケ屋に入った。やっぱり、日ごろの鬱憤を晴らすには、歌うのが一番だ。

「恋して～ 恋してラブミー～」

私は最初から十八番の曲である、アイドル『立ち漬ぎシスターズ』
の名曲、『恋してラブミー』を熱唱した。

『^た^こ立ち漕ぎシスターズ』

アイドル界では名の知れたアイドルグループの一つだ。アイドルプロダクション『わっしょい』に所属していた。

メンバーは3人。元気っ子のアミコ。元気っ子のサナエ。そして、元気っ子のビビカ。そう、普通アイドルグループはキャラがかぶらないようにメンバー構成をするのが普通である。元気っ子、おとなしい子、不思議ちゃん、このようにキャラがかぶらないようにするのが一般的なのだ。しかし、立ち漕ぎシスターズはその概念をぶち破り、まさかのキャラかぶりをやってのけ、マンネリ化していたアイドル界に風穴を開けた。

さらに、立ち漕ぎシスターズのすごいところはそのコンセプトにある。立ち漕ぎシスターズのコンセプト、それは

『超Hニースカートをはいてもパンツが見えない、脅威のフトモモ! ! ! ! !』

……今でもこのコンセプトを聞いたときの衝撃を忘れることができない。まさに青天の霹靂とはこのことだろつ。長年アイドルオタクであり、アイドル研究家とまで呼ばれるようになつた我ですら、その驚愕のコンセプトに度肝を抜かれた。

『立ち漕ぎシスターズ』は仕事がない時間帯は常に自転車を立ち

漕ぎし、フトモモを鍛え上げていた。そして、競輪選手顔負けの分厚いフトモモは、見事に右足と左足の間の隙間を埋め、男子諸君の永遠の憧れであるパンチラを封印してしまった……。

歌はよかつた……顔も悪くなかったのに……。

『立ち漕ぎシスターズ』が結成からわずか2年で解散してしまった理由は、おそらく鍛えすぎたフトモモであろう。このアイドル研究家の私が言うのだから間違いない……

「恋して～ 恋してラブリー～」

数年前、少し話題になつたアイドル『立ち遭^{まつ}きシスターーズ』の代表曲『恋してラブリー』を歌う少女。その姿は、ショッピングをしているときよりも、ランチで5人前の餃子を食べているときよりも、ボーリングでストライクを出したときよりも、カフェで巨大チョコレートマーブルを食べているときよりも、ゲームセンで昇竜拳を連発しているときよりも、輝いていた。

「恋の隙間は開けたらダメよ～ フトモモ閉めて逃がさない～」

まるで別人と思えるほど、少女はキラキラしていた。そのキラキラは、けして眩しいキラキラじやなくて、触れたら壊れてしまいそうな^{はがな}儚いキラキラだつた。「完全」にはない、「不完全」だからこそその魅力。彼女の歌う姿には、それがあつた。

「すごい！ すごいよ～！」

私は彼女が歌い終わると同時に立ち上がり、無意識のうちに拍手をしていた。私はこのとき初めて、「アイドル」というものを理解した。

アイドルは人に勇気を与える仕事でもなければ、ましてや憩いを届ける仕事でもない。がんばっている自分を見せ付けることで、あがいている自分を見せることで、「この子のために何かしてあげたい！」この子のために何か自分にできることはないだろうか？」そ

う、ファンに思わせる仕事なんだ。

自分以外の誰かのために生きることのスバラシさを伝える仕事、
それが『アイドル』なんだ……

「すゞい！ すゞいよー！」

予想外のふけさんの反応に、私は驚いた。

「ふん！ これくらい序の口よ。私の魅力はまだまだこんなもんじやないんだからー！」

私は少し照れながらも、強気な口調で応えた。

「他に歌える曲もあるんだ？ ゼひ、聞かせておくれよー！」

「そ、そ、そ、そこまで言われちゃ、しょうがないわね」

普段一人で歌の練習をしている私にとって、家族以外の人にこれほどの高評価をもらつたのは初めてで、正直、嬉しかつた。

ああ、やっぱりアイドルという仕事をあきらめたくない。

私はこのとき強く思った。たつた一人でも、こんなに目を輝かせて私の歌う姿を応援してくれる人がいてくれたら、それだけで本望だ。それだけで、アイドルを目指す価値がある。

「イチゴの馬車で、潮干狩り～」

私はいつもよりも3倍くらい高いテンションで、アイドル『水玉ボニーイチゴ姫』のサードシングルである『イチゴの馬車で潮干狩

り』を熱唱した。

『水玉ポニーイチゴ姫』

アイドル界では名の知れたアイドルだ。当時、アイドルプロダクション『わっしょい』所属。

メンバーは、『みゅみゅ』と呼ばれる小柄なアイドルと『ぼにゅー』と呼ばれる馬の着ぐるみを着た人。

キャッチフレーズは

『イチゴの国からこんにゅちわ。うつかり人間界にきちゃいましちや、テヘ!』

……そり、ガツチガチの不思議ちゃんアイドル。それが『水玉ポニーイチゴ姫』なのだ!! みゅみゅは身長148センチと小柄で、顔も童顔。胸はAカップ。まさに、口リの神様! はふつ!! は、鼻血が! ……取り乱して申し訳ない、話を続けよう。

例え容姿が整っていて、不思議ちゃんという特徴があつても、今 のアイドル界で活躍するのは難しい。それほど、今のアイドル界は 厳しいのだ。それは『水玉ポニーイチゴ姫』も同じだつた。ファーストシングル、セカンドシングルと泣かず飛ばず。全く売れなかつた。曲もよくなかったし、みゅみゅの歌唱力にも些か問題はあつた。さらに、途中で入る「ヒヒーん!」というポニューの泣き声が、非常に邪魔だつた。

そして、テレビ放送にも問題があつた。視聴者はかわいらしきみゅみゅを見たいのに、ポニューがみゅみゅの周りで奇妙なダンスを踊っているため、「みゅみゅに集中することができない!」、と苦情が殺到した。

そんな『水玉ボニーイチゴ姫』だが、サードシングル『イチゴの馬車で潮干狩り』で一気にブレイクすることとなる。

歌はファーストシングル、セカンドシングルと全く同じ路線で、不思議ちゃんを前面に出した曲だつたし、みゅみゅの歌唱力が上がつたわけでもなかつた。

では、なぜ売れたのか？ そう、ポニューが急にブレイクダンスをし始めたのだ！！ それが話題になり、一気に『水玉ボニーイチゴ姫』はブレイクしたのだった！ ……長年アイドル研究家をやつているが、アイドルというのはほんとにわからん。なんで、馬の着ぐるみがブレイクダンスをしただけで売れるんだ!? わからん……。つてか、絶対馬の着ぐるみの中身変わつてているだろ!! ……はあ、まだまだ、研究が必要だな。

ちなみに余談だが、みゅみゅはその後、年齢を誤魔化していたことが発覚（当時18歳といわれていたが、デビューしたときにはすでに26歳だった）。さらに、タバコを吸つているところや、路上で男とキスしているところを週刊誌に撮られ、酷いバッティングを浴びた。最終的には馬の着ぐるみを着ていた男（ブレイクダンスをしていた方）とできちやつた結婚をし、アイドル業界から去つて行つた…………アイドルのその後なんて…………その後なんて……

アイドル研究家とは、時にアイドルの裏側を見なければいけない、つらい仕事だなあ。私は改めてそう思った。アイドルの表面だけを見て、ただ喜んでいたアイドルオタクにはもう、戻れないのだなあ。私は少しセンチメンタルになりながら、頼まれたコラムの記事を書き上げた。

少女はカラオケ店に入つてから延長に延長を繰り返し、ついには営業時間ギリギリまで一度もマイクを離すことはなかつた。

普通の人だつたら途中で嫌になるかもしけないけれど、私は終始興奮し、楽しんでいた。少女の歌う姿はいつでも輝いていて、數十時間見続けても足りないくらいだつた。

「……カエテさん、君はなんでアイドルになろうと思つたの？」

少女の歌を聞きながら、私はあることを考えていた。

「君はどんなアイドルになりたいの？」

そう、それは短絡的で至極当然な思考の流れ。

「実は提案があるんだけど……」

「こんなに輝いている少女を、こんなところで埋もれさせたおくれにはいかない。それは、人類にとつて多大な損失だ。

「私が、君を、アイドルにする！」

私は少女のために、この身を擣げることを決意した。

「あ、ハルカさん。この前の『カシュー・ナッシュ』のライブ行きましたよ！ やっぱりハルカさんが一番輝いていました」

「ありがとうございます」

ハルカちゃんはにこやかな顔で俺の話を聞いていた。

「いやー、でもまさかほんとにハルカさんが僕に連絡くれるなんて……びっくりだなあ。まさかアイドルとこうやって食事ができるなんて、夢みたいです」

ハルカちゃんは無言で微笑み、たらこパスタを器用にフォークで巻き取り、品の感じられる所作で口へと運んだ。

「ところで、川島さんは社長さんとお知り合いだということでしたか……」

ハルカちゃんが「川島さん」と俺の苗字を口にした。それはつまり、彼女が俺という存在を認識したということだ。そう思ふと無性に嬉しくて、俺は舞い上がり、思わず嘘をついた。

「そ、そなんですよー。やつとは大学時代からの友人でね。いやー、ほんとあいつにはいろこりとしてやつたものですよ……」

ハルカちゃんの目がキョトンとしているのに気がつき、俺は思わず言葉の語尾を濁した。

「え？ 川島さんはないつなのですか？ とても社長さんと同じ年代の人とは思えないのですが……」

せうか、ハルカちゃんはあのへんなおじさんが実は28歳だつていひことを知らないんだ。

「……驚くかも知れないけど、あの社長、まだ28歳なんだよ」
「うむ……」

ハルカちゃんは店内に響き渡るような声を発した。よほど信じられなかつたのだろう。完全に瞳孔が見開いていた。

「す、すこません……」

ハルカちゃんは自分でも信じられないくらいの声を出してしまつたことを恥らい、顔を真つ赤にして小さくなつた。ああ、なんてかわいいんだろう……

「わ、私、社長さんに会いたいんです。お願いです。社長さんに会わせてください」

「う、うん。わかったよ……」

思わず了承してしまつたが、困つた。実際、変なおじさんとは友達でもなんでもないんだから。さて、どうしようか……。

俺はすっかり冷めてしまつたボンゴレソースパスタを口に入れながら思案した。

ふけさんとカラオケに行つてから10日後。私はふけさんに喫茶『パンヌス』に呼び出された。

「「めん、待つた？」

ふけさんは集合時間より30分遅れで喫茶『パンヌス』にやってきた。

「遅い！」

私は鬼の形相でふけさんを睨みつけた。

「「めんよ。でもせ、今日はいい報告があるから、それで許してよ」

ふけさんはやけに上機嫌だった。

「見て驚くなよ！ ほらー すごいだろーー！」

ふけさんは分厚いレポート用紙の束を私の顔に突きつけってきた。

「ちょっとー 近すぎて見えないわよー！」

私はふけさんの手からレポート用紙の束を取り上げた。レポート用紙には

と書かれていた。

「これは……？」

私の頭にはたくさんのクエスチョンマークが浮かんでいた。

「だから、相手を『当地アイドルとして売り出す』ことが市役所内で決定したんだよー。」

私は状況を理解できていない少女に向かつて力説した。私はもつと少女が喜んだリアクションをしてくれるだろうと期待していたので、少し熱くなっていた。

「……とりあえず、まとめると、私はアイドルとしてデビューできるわけ?」

「せうだよー、す、いだろー?」

「……この町の産の『暗黒豆腐』あんじく豆腐をアピールするアイドルなわけ?」

「やうだよ。君も食べたことあるだろ? 味はいまいちだけど、見た目が真っ黒でインパクトは抜群やー。」

「……曲は誰が作ってくれるの? 歌詞は?」

「作曲家に頼むお金はないから、私達で作るんだよー。」

「それで、アイドル名は……」

「ズバリー! 『暗黒豆腐少女』……どう? いかした名前だろ?」

「…………」めん、ちょっと考えさせて。頭痛くなってきたから、

私帰るわ。会計よろしく」

「あれ？ おかしいなあ……」

私は少女のために、少女の喜ぶ顔が見たくて、企画書を何度も何度も練り直した。少女のスポンサーになってくる企業を必死に捜し歩いた。それなのに、少女は喜ぶどころか、頭を抱えてしまった。私は自分の無能さが心底嫌になつた。自己嫌悪に陥つた。そのとき、

「……とりあえず、私のためにいろいろしてくれたこと、感謝しているから。ありがとう。ふけさん、あんた私のファン1号だわ」

少女は独り言のようにこう呟いて、喫茶『パンヌス』から出て行った。

「アキラ君、おめでとうございます。」

私はうまく表現できない、心のそこから湧き上がる感情をもてあります、思わず叫んだ。

当然、喫茶『パンヌス』のマスターに「ひねれこ」と注意されたのは言つまでもない。

「どうしよう……」

私は喫茶『パンヌス』を後にしてからずっと悩んでいた。そう、これは紛れもないチャンスだ。今まで数多くのオーディションに落ちてきた私にとって、またとないチャンスなんだ。……なんだけど、『暗黒豆腐少女』はさすがにないだろうよ！ 売れるわけないじゃん！

「はあ……」

そう、これはまさか元じぶんの舟に乗るようなもの。向こう岸に到着できる可能性は、ほぼ皆無。一度、『当地アイドルとしてデビュー』してしまつたら、その印象はその後もついて回る。もし、失敗したら、今後私が望むような正統派アイドルには、一度となれないかもしれません……

「カシューナツはお好きですか～」

ふと、アイドル『カシューナツ』の曲が聞こえてきた。駅前のパネル画面に映る、かわいらしげ制服を着た3人の少女。広い舞台の上で可憐に踊るその姿を見て、心のそこからうやましいと思つた。

私も、あの子達と同じ舞台に立ちたい。向こう岸に、行きたい。たとえ、私の乗る舟がどろ舟だとしても、今すぐ舟に乗つて漕ぎ出したい。

「ふうー……よしー！」

私は静かに深呼吸をし、決意した。

「今に見ていろよ『カシュー・ナツツ』め！　この『暗黒豆腐少女』が、今に追い抜いてやるからな！」

私は電車の轟音にまぎれて、大きな声で画面越しの『カシュー・ナツツ』に宣戦布告をした。

「決めなければいけないことは、たくさんあるんだけど……」

今日も私はふけさんに喫茶『パンヌス』に呼び出された。

「とりあえず、1ヶ月後の8月31日に商店街でお祭りがあるから、そこでのパフォーマンスが『暗黒豆腐少女』の初デビューになる。その日までに最低でも、衣装と歌を完成させないといけない

「1ヶ月後!? 結構直ぐね。私も練習時間が欲しいから、最低でも3週間後までには曲を完成させないと……。とにかく予算はどれくらいあるの?」

私はふけさんのおじつのハヤシライスをほおばりながら思案をめぐらせた。

「とりあえず、使えるお金は30万円だから、無駄遣いはできない。調べたところ、機材の準備に20万円くらいはやつぱりかかるらしい。だから衣装代は10万円が限度かな。衣装に関してはもう業者も見つけてあるから、どんな衣装にするか決めるだけでいいんだ」

「そう……じゃあやっぱり問題は曲ね。作詞は私達ができるとして、作曲はやっぱりかないものね」

「え? カエテさん、作曲できないの?」

ふけさんはキョトンとした顔でたずねてきた。

「うん、無理」

「そっか……」

ふけさんは頭を抱えて悩んでいる様子だった。

「うん、わかった。曲については私が何とかするから。とつあえず、今は衣裳と歌詞、それとコンセプトについて考えよう」

ふけさんはアボガドサラダを食べながら、自らが考えるコンセプトを話し始めた。

「私のイメージは、『日本人形』なんだ」

「はい？」

少女は不思議そうな顔をしていた。

「今考えているのはミニスカートの浴衣を衣裳にして、髪は黒髪ロングで、オーテコのところで直線にカットする。そして、キャラクターは暗めにして、時々ブラックな言葉を発する。キヤッチフレーズは『暗黒豆腐を食べなさい。じゃないと呪うわよ』みたいな感じで……」

「ちよ、ちよっと待つて！ それ、本気で言っているの？」

「……そうだけど、なにか問題でも？」

「問題だらけよ！」

少女はハヤシライスの米粒を飛ばしながらもう抗議してきた。

「まあ、落ち着いて落ち着いて。これはあくまでも私個人の考えだから。カエデさんの考えもちゃんと取り入れるつもりだから」

私は飛んでくる米粒を華麗に避けながら少女をなだめた。

「そう、ならよかつた。私はね……」

少女は再びハヤシライスの米粒を飛ばしながら、自らが理想とするアイドル像を話し始めた。

「ちょっと！ あんたさつき私の意見も取り入れるって言ったよね？ 言ったよね！？」

私は自分の考えがちと反映されないことに苛立ちを隠せなかつた。

「確かに言つたけど、無理だつて！ 学生制服を着て、元気の出るような明るい曲を歌つて、華麗なダンスを披露したところで、もう君の枠は今のアイドル界には存在しないんだよ」

「はあ？ なにそれ、あんた『正攻法じゃ私は敵わない』って言いたいの？ 遠まわしに私には才能がないって言いたいの？」

ふけさんは私の絶対的な味方だと思っていた。私のわがままを聞いてくれる人だと思っていた。私の才能を信じてくれる、唯一の人だと思っていた。それなのに、自分の考えを押し付けるだけ押し付けて、自分の思い通りに行かなくなると平気で約束を破る、そんな嫌なやつなのだと思った。腹が立つた。

「そうじゃない！」

突然、いつも温厚なふけさんが、怒った表情でテーブルを叩いた。私はかなり驚いた。

「な、なによ……」

「そうじやないよ……君はすげー才能がある。君はもつと世間に認知されるべき人間だよ。少なくとも私は、心の底からそう思っています。

でもね、世間はそんなに甘くないんだよ。君の望みが他の人の望みと同じとは限らない。君以外の人にも望みがあつて、その望みを叶えようと必死になつていることを知つて欲しい。多くの人がそれぞれの望みを叶えようと、おしゃくらまんじゅうをしている、それが社会なんだよ。

自分の望みを叶えるには他の人の望みを踏み潰さなければいけない。時には譲歩して、自分を変えなければいけない。時には人を操らなければいけない。時には嘘をつかなければいけない……。そういった努力をして、初めて自分の望みが叶うんだよ。

だから、もうそろそろ君も自分を高めるだけの努力はやめて、自分の望みを叶えるために周りに働きかける努力をして欲しい。自分を変えてでも、望みを実現させる努力をして欲しい

ふけさんは、何故か泣いていた。ふけさんの言葉は難しくてよくわからなかつたけど、涙は本物だと思った。この人は本気で私のことを考えてくれているのだと思えた。この人を信じてみたいと思つた。

「わかった。ふけさんの言つとおりにやつてみるよ

『人を信じる』という行為はすごい。

一度その人を信じてしまえば、その人の考え方や言動を信じることができます。自分の信じた人が信じたものを信じることができます。信じた人が出した答えを、自分の答えとすることができる。

それはつまり、自分が二人いるようなもの。信じる人が多ければ多いほど、私の世界は広がるんだ。そして、私のことを信じてくれる人が多ければ多いほど、私の望みは私を信じてくれる人の望みとなり、広がっていく。自分の望みを叶えるには、多くの人に信じてもらえる人間になればいい。私は、そういうアイドルになろう。

涙を流しながら喫茶『パンヌス』のマスターに怒られているふくさんを見ながら、私はそんなことを考えていた。

29・ふけさん（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

「さてと、それじゃ行きますか」

夜もふけたころ、私はアイドルプロダクション『わっしょい』のオフィスに潜入するために、隣のビルの屋上にいた。

私は『暗黒豆腐少女』の曲をどうしようか考えた。自分達で曲を作ることは不可能であり、それならば、誰かに作ってもらつしかない。しかし、金がない。ならば……盗むしかない。

アイドルプロダクションには、おそらくボツになつた楽曲が複数あるはずだという考え方のもと、私はその楽曲を盗むことを決意した。……といふか、またいつものように思つてしまつたのだ。

『ルパン三世のよひ』ビルに潜入して、楽曲を盗むことができたら、楽しそうだ』と。

そして、一度そう思つてしまつと実行せざにはいられないのが、私という人間なのだ。

そう言ひ理由で今、私は全身黒タイツを身にまとい、隣のビルの屋上からアイドルプロダクション館内へ侵入するためにロープを手に取つてゐる。この日のために、ルパン三世DVDボックスを購入

して、勉強してきたのだ。絶対に「うまくいくはずだ」。

「ふん！ ふん！ はつ！」

私はルパン三世顔負けのロープをばきでアイドルプロダクション『わっしょい』の屋上の柵に掛け、ロープを放り投げた。

「よし！」

私の投げたロープの先の”わっか”が、見事にアイドルプロダクションの屋上の柵に引っかかった。

「ん！ んっしょ！ ……よし、これだけ固く結べば大丈夫だろう」

私は今いるビルの屋上の柵にもロープの端をくくりつけ、ビルとビルの間に、一本のロープをまるで橋の様にピンと張ることに成功した。

「うんしょ、うんしょ！ よし！ これなら大丈夫」

私はロープが外れないのを確認してから、慎重にロープに捕まつた。そして、宙ぶらりんになりながら、今いるビルとアイドルプロダクションとの間を渡り始めた。

「びゅーううう！」

冷たい夜風が吹き付ける。地面まで垂直距離で30メートルはあるだろうか？ 落ちたらただでは済まないぞ……。そう思つと、急に体が震えだした。そのとき、

「うわああああーーー！」

私は、思わずロープから手を離し、落下してしまった。

落下中、私はけたたましい警報音がプロダクション館内で鳴り響くのを聞いた。

「はあ……疲れた」

今日はいつもより忙しい日だった。プロモーション活動や定期公演、さらにはプロダクションオフィス館内のスタジオでダンスのレッスン。

気がつくともう、今日が終わろうとしていた。アイドルという仕事を樂じやしないなあ……。私は窓から顔を出し、夜風に当たりながらそんなことを考えていた。

「はあ……」

そして、6メートルくらいの距離にある、隣のビルの窓に映る少し疲れた自分の顔を見て、ため息をついた。

「はやく、社長さんに会いたいなあ

私はそんな願い事を呟いた。

「うわああああ……」

すると、私の願いが通じたのか、目の前に社長さんが現れた。そして、一瞬で消えていった。

「え! ? え、ええ! !」

幻覚!? でも、幻覚にしてはリアルだったような……。私が一

瞬のありえない出来事に驚いていると、

「 ピピピピピピ... ピピピピピ... 」

けたたましい警報音がプロダクション館内に鳴り響いた。え?
今度はなに? ?

「 ハルカちゃん、みーつけた... 」

私が振り返ると、そこには”ハルカ LOVE”と書かれた、アイドル『カシュー・ナッシュ』の限定Tシャツを着た、気味の悪いおじさんがいた。

おじさんはカッターナイフを持っていて、そのカッターナイフからは真紅の血がぽたぽたと滴り落ちていた。

「はい、わかりました！　直ぐに向かいますー！」

俺は通報を受けて直ぐにパトカーに乗り込み、アイドルプロダクション『わつしょい』のオフィスビルへと向かつた。なんでも、アイドルのストーカーがオフィスビル内でカッターナイフを振り回して暴れているとのことだった。確かアイドルプロダクション『わつしょい』はハル力ちゃんが所属しているプロダクションだったはず。

ハル力ちゃん、大丈夫かな……。

俺はハル力ちゃんのことが心配になり、少しでも急いでアksesルを強く踏み込んだ。

「わい、じうじようか……」

読者諸君、私の心配をしてくれてありがとう。でも、大丈夫。こんなこともありますから、ちゃんと命綱を巻いていたのだ。そのおかげで、私は無事だ。無事なのだが、困ったことに、今空中で宙ぶらりんの状態であり、そこから抜け出せなくなってしまったのだ。

「ふん！　ふんふん！…」

私は体を振り動かし、振り子の要領でアイドルプロダクション『わっしょい』のビルの窓に手をかけようと努力した。

ラッキーなことに、一番近くにある窓が開いている。あそこから進入しよう。

私はそんなことを考えながら、まるで“ミノ虫”みたいに必死に体を動かした。

「あと、あと少し……」

私の振り子運動は徐々にエネルギーを増して行き、あと一息で窓枠に手が届くまでになった。

「あやああああ！…」

私がめいいっぱい体を振り動かし、窓に向かって突っ込んだとき、女性の悲鳴が聞こえた。何事だ！と思つた瞬間、カッターナイフを持つた謎のおっさんが急に田の前に現れた。

「もげえ！！」

そして、そのおっさんの顔に、振り子のエネルギーを蓄えた私の頭蓋骨が激突した。

「あやああああ……」

氣味の悪いおじさんはカッターナイフを振りかざし、私に向かつてきた。私は怖くて田を隠り、とつてに恋を背にして身をかがめた。

「もげえ……」

もげえ……？ 「もげえ」という滑稽な声を不思議に思った私は恐る恐る田を開けた。すると、氣味の悪いおじさんは何故か気を失つて倒れていた。

「いつたい……」

私が状況を理解できず、キョトンとしている

「ちょっと、そこのお嬢さん。悪いけどそこにあるカッター取つてもいいえる？」

窓の外でロープに吊られている男性に話しかけられた。

「……社長さん？」

その男性は、紛れもない社長さんだった。

「はやくしてくれるかな？ 結構つらこんだよね、ロープで吊られるのつて」

「あ、はい……」

私は社長さんが全身黒タイツ姿でロープに吊りれていたところ、ありえない状況を前に、混乱していました。

何かの撮影、なのかなあ……。

それくらいしか、この状況をつまぐ説明する以外のどうでもいいが思ひ浮かばなかつた。

「 もう少し、手を伸ばして」

社長さんはまるで、振り子のような動きで窓に近づいてきた。

「は、はい」

私は社長さんに言われるまま、窓からめこにっぽに身を乗り出して、カッターナイフを差し出した。

「あつがとう。それじゃ」

カッターナイフを受け取った社長さんはそのまま、血の体ごくごくつけてあるロープを切断した。

「あああええええええ！」

そして、暗がりの地面へと消えていった。

俺が到着したときには、もつすでにストーカーは取り押さえられたあとだった。

「それじゃあ、こいつはハルカさんのストーカーだったんですね。……ハルカさんは無事だったのでしょうか？」

「無事でしたよ」

俺は思わず胸をなでおろした。

「それじゃ、このストーカーは俺が署まで連れて行くから、あとのことはよろしくな」

一緒についてきた先輩が、一足先に犯人を連れて行つた。ストーカーの背中には『ハルカ LOVE』という文字があつた。その文字を見ると、なんだかストーカーのことを憎めない自分がいた。

「それじゃあ、報告書を書くために、状況を聞かせて欲しいのですが。あと、現場も見せてください」

俺はとりあえず、自分の職務を全うすることにした。できることなら今すぐハルカちゃんに会いたいが、それは叶わぬ夢。業務を終えたらメールでもしよう。

俺はそんなことを考えながら報告書を鞄から取り出そうとした。そのとき、ハルカちゃんのマネージャらしき女性に声をかけられた。

「あの、お忙しいところ申し訳ないんですが、ハルカを家まで送り届けてくれませんか？ハルカ今、すぐおびえているんです。警察の方なら安心ですし……」

「はい！任せください！」

俺は報告書を鞄に押し戻し、即答した。

「わざわざ、お宝はどこかな～」

無事に地上に降り立つた私は、アイドルプロダクション『わっしょい』のビル内に潜入した。詳細はわからないうが、なにやら事件があつたらしく、そのゴタゴタに紛れることができた。

「『』が怪しいな」

私は「倉庫」と書かれた部屋を見つけ、特に深く考えずにその部屋に入った。倉庫の中は薄暗く、少しかび臭いにおいがした。およそ10畳くらいの部屋には銀色の棚が並んでいて、そこには衣類や小物が雑然と置かれていた。

「あのダンボールが怪しいな」

私は倉庫の奥のほうにあるダンボールに目をつけた。そのダンボールからは黒いカセットテープがあふれ出ていた。私はそのダンボールを取り出そうと、奥の暗がりへと向かった。

「あの……どちら様ですか？」

倉庫の隅。闇の中。ゆれる黒髪。鈍い光を放つ眼鏡。その眼鏡の奥にある、淀んだ瞳と田字が合つた。私は思わず「わあ」と叫んだ。すると、黒髪眼鏡の女性も「わあ」と叫んだ。

「す、すいません。驚かしてしまいましたね。私、高橋未実と申します。倉庫の管理人です」

黒髪眼鏡の女性はすぐつ、と立ち上がり、そう言ってお辞儀をした。そのとき、私は不覚にもドキッとしてしまった。立ち上がった彼女の細長く色白な手足に。そのショットとした美しい輪郭に。そして、そのへたくそな笑顔に。

こんなにも笑顔のへたくそな人がいるのかと思うほど、彼女の顔は引きつっていた。このへたくそな笑顔、どこかで見たことがあるようだ……。私は顔面痙攣でもしているのかと思うほどピクピクした表情筋を見ながら記憶をたどった。

「……あなたもしかして、占いアイドル『クリスタル』の『//』さんですか？」

黒髪眼鏡の女性は小さく「はい」と呟き、ゆっくりとうなずいた。

占いアイドル『クリスタル』

アイドル研究家の間では、有名なアイドルグループの一つである。アイドルプロダクション『わっしょい』に所属していた。

メンバーは、未来を見ることができる（という設定の）『ミリミ』、過去を見ることができる（という設定の）『ミカ』の二人。明るいアイドルが多い中、「暗さ」を売りにした数すくないアイドルグループであり、デビュー当時からそのキャラクターは話題を呼んでいた。

そんな彼女達の一番の魅力は「占いができる」という設定であることは言つまでもない。しかし、そんな特技一つで乗り切れるほど、アイドル業界の波はやわくない。最初こそはその面白い特技に業界が食いついた。しかし、ある程度するとすぐに飽きられてしまった。それはある意味、アイドルの運命なのかもしれない。

そんな中、何とか人気を保つていられたのは他ならぬ、『ミリミ』の存在あつてのことだろう。『ミカ』ははつきり言ってかわいくなかつた。太つていたし、顔もアイドル水準を満たしていなかつた。それに、がさつで品がなかつた。ただ、しゃべりが達者で人に取り入るのがうまかつたため、何とかアイドルとして生き延びることができていた。

その反面、『ミリミ』は超美形で色白、さらにスタイルが抜群に良か

つた。歌唱力もすばらしく、何より品があった。アイドル研究家の私から見ても、過去から現在を通して5本の指に入るほどアイドルポテンシャルの持ち主だった。しかし、そんな『ミリ』にはアイドルとしての致命的な欠点がいくつかあった。まず、笑顔がへつたくそだった。その笑顔はあまりにも酷く、ネットでは『顔面麻痺』というあだ名で『ミリ』の引きつった顔の画像がネタとして多く使われた。さらに、声がとても小さく、閉鎖的で、うまく人に取り入ることのできない人間だった。人に何か頼みごとをすることのできない人間だった。

それは、アイドルとして致命的だった。アイドルとは人に頼みごとをする仕事であり、人にお願いをする仕事なのだ。自分という存在を押し付ける仕事なのだ。でも、『ミリ』はそれができない人間だった……。

結果的に、占いアイドル『クリスタル』は結成から5年で解散を向かえた。『ミカ』のアイドルとしての実力不足と『ミリ』の社交力の低さを考えれば、まあ、長続きしたほうだと私は評価している。

ちなみに予断だが、『ミリ』は今現在アイドルプロダクション『わっしょい』の社員として働いている。そして、『ミカ』は、女優として体をはつて……当然、まつとうな女優ではないことは、賢い読者諸君ならおわかりだろう。アイドルの水準を満たしていい賞味期限切れの女が行きつく先は……はあ、想像したくもない。

アイドルのその後ほど、残酷なものはない。私はそんなことを考えながら、締め切りギリギリでコラムの記事を書き上げた。

37・ふけさん

「ところで、あなたはどうちら様ですか？ 何の用があつて、めつたに誰も来ない倉庫にいらしたんですか？」

「え……実は……そ、そう！ 私はプロデューサーです。実は過去にボツになつた音源を捜しに来たのですが……」

私は///さんのに問い合わせるために答えるため、とつて口嘘をついた。まあ、いつものことだ。

「……それでしたら、こちらのダンボールにありますので、どうぞ」

///さんはか細い両腕で、大きな段ボール箱を棚から下ろそうとした。私は///さんの細い腕が折れてしまつのではないかと思い、ハラハラした。

「ああ……」

案の定、///さんのか細い腕ではダンボール箱を支えることができず、棚の上からカセットテープが大量に入つたダンボール箱が落ちてきた。

「危ない！」

私はとつて腕を伸ばし、///さんを抱きしめて落卜するダンボールから守つた。

「あつがとへ……」『わこまわ』

『わこ』の顔が近い… う、美しい…

「あ、す、すいません……」

私はとつやのこととはこえ、『わこ』を抱きしめて恥ずかしくなり、直ぐに手を離した。

「ははは、あー、」これですね。では、いただいてこります。そ、それじや

私はテレを隠すよつこ、地面に散らばつたカセツトテープの中からテキトウに一つ手に取り、その場から逃げよつとした。

「ちよ、ちよつと待つてください…」

不意に、『わこ』に呼び止められた。もしかして、愛の告白かい？ ベイビー。俺にほれたら、火傷じやしまないぜー。

「何で全身黒タイツ姿なのですか？」

「……最新のオシャレです」

「私、これでも勤勉な性格でし、社員の方全員の顔と名前を把握しております。しかし、あなたのことは知りません。それに、あなたのその格好……まるで、映画に出てくのよつな泥棒にしか見えないのですが……」

私は直ぐに身をひるがえし、全速力で倉庫の出口に向かつて走った。やばい、ばれた。

「あ、あのー、ちょっと待ってくださいー！これ……」

「さん、か細い声で何かを叫んでいたが、私は聞こえないから逃げ出した。

「ハルカさん、怖かつたでしょ。でも、安心してください。僕が無事にあなたの家まで送り届けますから！」

「ありがとうございます」

警察の川島さんが私をパトカーで送ってくれることになり、私はパトカーに乗り込んだ。パトカーに乗るなんて、なかなかできない体験だわ。私は社長さんと出会えたうれしさとあいまって、かなり興奮していた。

「しかし、ゆるせませんね、あのストーカー。ハルカさんのことを大好きな気持ちはわかりますが、危害を加えるのは愛情の表現ではないですよ。欲しいものが自分の手にはいらないことが、我慢できない。ガキみたいな最低なヤツですね」

車中、川島さんはずっとしゃべっていた。きっと、川島さんなりに気を遣つてくれていたのだと思う。でも、申し訳ないことに、このときの私には川島さんの気遣いに応えるだけの余裕はなかつた。

「僕なら、我慢しますね。そりや僕だって男ですから、欲の一つや二つありますけどね。でも、人を傷つけてまでかなえる欲望に、僕は嫌気がさしたんです。だから、警察官になつたんです。」

人は、何か一つ欲望を我慢するだけで、平和に暮らすことができるんです。一人の我慢は微力かもしれませんのが、60億人の我慢は世界平和につながるんです。みんながそれぞれ、一つでいいから欲望を叶えることを我慢する。その助けができる仕事、それが警察官

だと思つたのです

我慢……かあ。私には、無理かもしれない。私は見た目おとなしいと言われることが多いけど、実は野心家で、自分の望みをあきらめるのが嫌いな人間だから。今だつてそう、社長さんに会つたことで、社長さんに対する思いはさらに強くなつた。この思いを我慢するなんて、我慢しながら生きるなんて、無理だ。

「川島さん……」の前お願いしたことなんですが……」

「ああ、社長さんに会いたいんだつけ？ ちよ、ちよつと待つてね。あいつ、ほら、い、忙しいみたいでさ。もつもつと、時間がかかるかなあ……」

「そつ、ですか……川島さんは社長さんの好きなものとかわかりますか？」

「え、えつと……あ、ほら！ ハルカさんの家にちつ着きましたよ！ 僕はまだ仕事が残つてるので、失礼します。それじゃ、今日はゆっくり寝てくださいね」

私をパトカーから降ろすと、川島さんは逃げるよつこ、アイドルプロダクション『わつしょい』に再び向かった。

「どうしたんですか！？」

俺が再びアイドルプロダクション『わっしょい』に戻ると、玄関ホールには人だかりができてあり、騒然としていた。

「もう一人、不審者がいたんですよ！ ほら！ こいつ全身黒タイツ姿で怪しいでしょ！？ それに凶器のカッターナイフも持つているんですよ！！」

「違う！ そのカッターナイフは拾ったものだ！ この全身黒タイツはただのオシャレだ！！ レディー・ガガの奇抜なファッショングが認められて、何で私の全身黒タイツは認められないんだ！！ 不公平じゃないか！！」

全身黒タイツの男……紛れもない、「変なおじさん」だ。ハル力ちゃんが「社長さん」と呼ぶ、田中敬一という変人だ。まさか、こんなところで出会えるとは……。

このとき、俺の脳裏に悪い考えが浮かんだ。私利私欲を叶えるための、悪い考えが。しかし、俺は欲望を抑える手伝いをするために警察官になつたのだ。そんな俺が、自分の欲望を叶えるために、この悪い考えを実行するわけにはいかない……。しかし、このままでは、ハル力ちゃんとの約束が、関係が……。

「『』協力感謝します。この男は私が責任を持つて、署まで連行します。それでは！」

「くそ！ 離せ！ また、お前か！ 国家の犬め！ ロンチクショウ
ウ！！」

俺は暴れる田中敬一を無理やりパトカーの助手席に押し込み、すぐにはパトカーを発進させた。そして、アイドルプロダクション『わつしおい』から数百メートルくらい離れたところで口を開いた。

「おい、田中敬一。おまえ、今回は見逃してやる。そのかわり……
俺と友達になってくれ！！」

心の善と悪の葛藤は、あっけなく悪が勝利した。いくら口で偽善を言おうと、人は自分の欲望を抑えることができない。だから、世界はいつまでも平和にならないんだ。

俺は世界不平和の原因の一端と成り果てた自分自身を軽蔑しながらも、田中敬一と偽りの友情を交わした。

40・カエテ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話「」とに主人公がかれますので、少し読みにくいかも知れませんが。ご了承ください。

『』

「すじー！ これ、すじくいいメロディーだよ！ 誰に作ってもらつたの？」

私はふけさんが持つてきたカセットテープの音源を聞いて、興奮した。アイドルらしい、ポップでキュートなメロディー。私は、一聞で心を奪われた。

「いや、その……と、友達に作曲家がいてね……」

「なんて人？ 一度お会いしたいなあ」

私はこんなステキなメロディーを作れる人に会つてみたいと思った。

「いや、それはちょっと難しいかな……」

「えー、なんで！ いいじゃん！ 友達なんでしょう？」

「う、うるさい！ そんなことよりも、問題は歌詞だよ歌詞！ 歌詞をこれから僕達で作らなくちゃいけないんだからね」

ふけさんは少し怒つたような口調でそう言つと、原稿用紙とボールペンを取り出した。

「はい、これ使って。とりあえず、一人で考えてみて。私も考えておくから。明日またここに集合とことことで。それじゃ」

ふけさんは約2週間後に控えた『暗黒豆腐少女』デビューライブ関係の仕事がたくさんあるらしいへ、そそくひと帰り支度をした。そして、去り際

「『暗黒豆腐』を必ず歌詞の中に入れてね。それじゃ

と言つて、喫茶『パンヌス』から出て行つた。

「いつたい何の用だ？ 私は忙しいのだが」

明らかに不機嫌な表情で田中敬一はやつてきた。

「今日は打ち合わせだよ。お前、アイドル『カシュー・ナツツ』を知つていいか？」

「知らん。『暗黒豆腐少女』以外のアイドルに興味はない」

田中敬一は即答した。

「あつそ。まあいいや。とりあえず、お前は俺の言つとおりに行動してくれればそれでいい。言つとくけど、お前を捕まえようと思えばいつでも捕まえられるんだからな。ちやんと俺の言つことを聞けよ」

俺は、自分が田中敬一よりも立場が上であることを改めて諭した。

「……ふん、わかつたよ。お前の言つとおりに『友達』に付き合えばいいんだろ？」

田中敬一は不満が顔に出ていたが、しぶしぶ俺の要求に応える決意をしたようだった。

「わかればよろしく。それじゃ、本題に入るぞ。お前がさつき知ら

ないと言つたアイドル『カシュー・ナッシュ』のハルカちゃんが、お前に会いたいと、言つてゐる」

「私に？……なぜ？」

田中敬一は腑に落ちない表情をしていた。

こんなアホ面のおっさんに、なんでハルカちゃんは会いたいんだ？くそ！こんなおっさんよりも、絶対に俺のほうがいい男なはずなのに……。

俺はそんなくすぐる感情を抑えながら話を続けた。

「理由は知らんが、お前のこと 아이ドル『プロダクション・わっしょい』の社長だと、勘違いしているんだ」

「……私が社長？ ますます、わからん

「とにかく、お前は社長で、俺の大学時代の同級生なんだ。いいな？あと、実際にハルカちゃんに会うときは、俺のことをほめろ！ほめてほめて褒めちぎれ！ それでだな……」

俺はこんな感じで、田中敬一に指導を続けた。

『申し訳ない、今日も会えません。歌詞の話は明日しましょ』

ふけさんから、こんな味氣のないメールが届いた。歌詞を書いておくようにと言われてからすでに3日経つ。ふけさんも忙しいのはわかるけど、歌詞が完成しないと、もともこもないんだからね！わかつて『いるのかしら？ ふんすか！』

喫茶『パンヌス』のいつもの席。私は真っ白なノートを前に、イライラしていた。3日間必死で考えただけれど、あの素敵でメロディーにあう歌詞が思い浮かばなかつた。正直、歌詞を生み出すことが出来ない自分を腹立たしく思い、落ち込んでいた。

だから、今日はふけさんに相談したかったのに……なんで来ないんだよ、あのバカ……。

「ああああ！！ もう！ ここでウジウジしていても、何も出でこんわ！ マスター！ お勘定！」

私はお勘定を済ますと、喫茶『パンヌス』を飛び出した。そして、『暗黒豆腐』を売っている豆腐屋『白角^{はっかく}』へと向かった。

ふけさんから、「一度あいさつに行くよ」とて言っていたし、もしかしたら、何か良い歌詞のヒントがあるかもしれない！私はイライラする気持ちを抑えながら、早足で歩いた。

「『』かあ……派手な店だなあ。豆腐屋に見えないし」

田がチカチカする蛍光色。『白角』と書かれたド派手な看板。店の雰囲気とミスマッチなビートルズのBGM。ここは、サークルスか！ そう、突つ込みたくなるような、へんてこりんな店。私は、この珍妙な店の豆腐を宣伝しなくちゃいけないのか……。何故か私はがっくりしてしまった。

「『』にちは……」

私はがっくりしたテンションのまま、店内へと足を踏み入れた。

「ひっしゃい」

少し口吻モテのおじさんが店番をしていた。

「あの……私、『』の『暗黒豆腐』を宣伝させていただきます、アイドルの……」

「ああ！ あんたカエデちゃんかえ？ ふけさんから、聞いとるだよ。曲作りは順調かえ？ おら楽しみにしとるだよ。それにしても、ベッピンさんだねえ」

「口モテな表情からは想像できないような高い声、しかもなまつた口調で、店主らしき人が話しかけてきた。

「はあ……、まあ……」

「今日はどうしたね？」

「いや、良い歌詞が浮かばなかつたので、『暗黒豆腐』を実際に見てみよつと思いまして……」

「ほうか、ほうか。好きだけ見ていいって頂戴。好きだけ試食してもらつてもかまわんたい。なんたつておじょうちやんは、うちの大事な『アイドル』だからね」

「はあ……それじゃ、遠慮なく」

私はやけにフレンドリーなおじさんとの会話を早々に打ち切つて、豆腐とにらめっこを始めた。

「うわ……黒くて気持ち悪い……」

真っ黒な『暗黒豆腐』を見て、私の食欲は減退した。

「ほれ、食つてみな」

ありがた迷惑な店主が真っ黒な豆腐を私に差し出してきた。

「あ、
……はい」

さすがに、断るわけにもいかないので、私は『暗黒豆腐』を口に放り入れた。

「じゃつだ？　つかえーだひへ。」

「……おもしろい味ですね」

ね由に「おこしー」と言えない、なんとも不可思議な味の豆腐。おそらく海産物が含まれているであろうかの黒い肉体は、膣めば膣むほど豊かな生臭さが鼻腔を通り抜け、嘔吐中枢を刺激する。

「ほれ、まだいつぱーあるから、どんどん食べなって」

おせつかいな店主は『暗黒豆腐』を次々と私の口に押し入れてきた。

「はぐつ。もぐもぐ……」

不味い。

「ほれ、まだあるでよ」

「はぐつ。もぐもぐ……」

吐き出さ。

「いひちば茹でたやつだん。おこしーがわー」

「はぐつ。もぐもぐ……」

辛い。

「麻婆豆腐にも、あうんだで」

「はぐつ。もぐもぐ……」

もう、お腹パンパン。

「ワサビ醤油で食べるぞ、また格別だで」

「さあ、もういいやつだ。

誰か、助けて……。

おせつかいな店主のおせつかいなサービスは止まる気配がなく、次々と黒い豆腐が運ばれてくる。私は怒りにも似た感情を抑えつつ、無言で豆腐を食べた。これもアイドルになるためだ……。私はそう思い、必死に耐えた。

「ばぐひ。もぐもぐ……」

「……せぐせぐ」
いいかげんに

「せぐり。めぐらしへ」

…………もう、限界だつた。頭の中で「ブチッ」と何かが切れる音がした。気がつくと、私はスポンサーである豆腐屋の店主の胸ぐらを掴んでいた。

「じじい！－！－！不味いんだよ－！－！こんな生臭せえ豆腐、誰が食
うかああああああああああああああ－！－！－！」

私は店主をぶん殴り、豆腐屋『白角』から飛び出した。

『ふけさん、『めん。店主殴つた』

「ぶはあうわうううううううう！」

私はカエデさんからのメールを読んで、思わず飲んでいたコーラを噴出した。

「おい！ 田中敬一汚いぞ！」

「すまん、友よ。急用ができた。サラバ！」

私は直ぐに荷物をまとめて、席を立つた。今日も川島くんに拘束されていたのだが、これは一大事。川島くんにかまつていて暇はない。

「おい！ まだ話は終わってないぞ！ 捕まえるぞ、この野郎！！！
お……」

背後で川島くんの声が聞こえた気がしたが、きっと空耳だらう。私は大學以来の親友であり、現在警察官として立派に働いている川島くんに心の中で「サヨナラ」と別れを告げて、喫茶『パンヌス』へと急いで向かった。

「カエデさん！？ いつたいどつこつことなの！？ カエデさん？」

喫茶『パンヌス』のドアを勢いよく開けて、困惑の思いを叫びながら、私はいつも席を見た。そこに、カエデさんの姿はなかつた。

「カエデ……さん？ どこにいるの？」

「やあ、ふけさん遅かつたね。カエデちゃんなら、さつき救急車で運ばれたよ」

「え！？ どいつ」とマスター！？ どこの病院？ 何があつたの？ 怪我？ 病気？ 事故？ 何があつたの！？」

私はマスターの胸ぐらを掴み、大きく揺さぶり、真相を求めて詰め寄つた。

「うげえ……ぐ、ぐるぢいよ……」

「ねえ！…マスター！…答えてよ！…」

「ぐう……がほお！…」

「どつこつことなんだよー マスター！ 何とか言ってくれよーー」

「…………」

数分後、マスターは何故か氣を失い、倒れた。カエデさんだけでなく、マスターの身にまで災いが起るとは……。

何かが狂い始めている。私はそう思わずにはいられず、とりあえず救急車を呼び、マスターの胸元についている私の指紋を拭き取り、ことの一部始終を見ていた客に賄賂わいろを渡して退店してもらい、喫茶『パンヌス』の店先に「本田の営業はマスター不在のため休止致します」と書いた紙を張った。

「ピー・ポーピー・ポーピー・ポー」

そして、救急車が喫茶『パンヌス』にやってくると、救急隊員に「どうやら喫茶『パンヌス』の経営がうまくいかず、マスターは自殺を図つたらしい」と虚偽の状況を説明し、気を失ったマスターと共に、私は救急車に乗り込んだ。

「ただの食べすぎですね。安静にしていれば直ぐに良くなりますが」

「……氣持ちわる。暗黒豆腐、食べ過ぎた」

私は豆腐屋『白角』の店主をぶん殴つて直ぐ、ふけさんにメールを送り、いつもの喫茶『パンヌス』でふけさんのことを持つていた。ふけさんなら、直ぐに駆けつけてくれると思ったから。

ふけさんを待つている間、マスターに愚痴を聞いてもらっていたのだけれど、急に気持ちが悪くなつて、意識が朦朧とした。私はマスターに助けを求めて、救急車を呼んでもらつた。そこへんからから記憶がなくて、気がつくと病室のベッドの上だった。

「はあー……やつちまつた。夢じゃないんだよね……」

私は、「あんなに不味い豆腐を食わせる店主が悪い！」と思ひながらも、軽率であつた自分の行為を悔いた。さすがに殴るのは、まづかつた。

「カエテさん！ いつたいビツコツヒトなのー？ 説明して頂戴ー！」

私が反省してみると、突如、病室にふけさんがやってきて私はび

つくりした。

「どしたのどしたのどしたの！？ 何で殴っちゃたの！！」

ふけさんはかなり取り乱していいる様子だったので、私は気持ちを落ち着かせてから、ことの顛末てんまつを説明した。

「『めん、店主殴った』

少女は語る。

「歌詞が全然思い浮かばなくて、むしゃくしゃしてた」

私は頷く。

「豆腐屋に行って、実際に『暗黒豆腐』を見れば、歌詞が思い浮かぶと思った」

少女は語る。

「そしたら、店主がなれなれしい態度で近寄ってきたの」

私は頷く。

「最初から、いけ好かないヤツだとは思つてた。でも、私我慢したんだよ。ふけさんの努力を無駄にしないよつ」

少女は語る

「でも、あの店主、糞不味い『暗黒豆腐』を無理やり私に食べさせ
て」

私は頷く。

「私、我慢できなくなつて、殴つた。『ごめんね、ふけさん』
少女は語る。そして、謝罪する。私は、「もう終わったことはし
ょうがない」と少女を慰めようとした。少女が「でもね」というま
では……。

「でもね、ほんとうに不味かつたのよ、あの豆腐。糞ます、ゲロますよ。私、あんなに不味い豆腐のアイドルにならなくて良かったと思う。ほんとうに。だって、あんなに不味い豆腐に未来はないもん。ほんと、あんなに不味い豆腐を作つていてる店主、頭おかしいんじゃないの？ あんな豆腐でこの先やつていけると本当に思つているのかしら？ ありや、クズだね。人間のクズだよ。だって、あんなに不味い豆腐を作つて、人様に売つて、金をもらおうとしているんだよ！？ 信じられる？ あたしやあ信じられないね……」

私の口から、罵詈雑言が溢れ出る。あれ？ あたしつて、こんなに饒舌だつたけ？ あたしは何で、間を空けず、心にもないことをしゃべつているのだろう？

私がそんなことを考えていると、ふけさんが、怒鳴りだした。

「君は何を見てきたんだ！？」

ああ、そうか……。私は、ふけさんに怒鳴られるのが怖くて、ふけさんの期待を裏切つてしまつたことが悲しくて、間を空けずに罵詈雑言を吐き出していたんだ……。

「ああ、確かに不味いよ。私も食べた。生臭かつたよ。でもなあ、なんでそのまざい豆腐を店主が売つていてるか、君は疑問に思わなかつたのかい？ その不味い豆腐を買つてている人の気持ちを考えなかつたのか？ 君は表面だけをみて、その裏にある真実をちゃんと見極める努力をしたのかい！？ ……上辺だけを見て、感情だけで行

動する人に、アイドルは務まらないよ

ふけさんの言葉、痛かった。

「……失礼する」

ふけさんは病室から出て行つた。私は一人、病室に取り残された。

『8月31日、久しぶりに休みをいただけることになりました。ですから、その日に社長さんを紹介していただけると、うれしいのですが……』

「よし、送信つと」

私はいつまでも確信的な返事をくれない川島さんで、催促のメールを送った。

「…………」

いつもなら、私がメールを送った1秒後に返信が来るのに……。明らかに返信が遅い。川島さん、困っているのかなあ……。

私は何の気なしに服を着替えた。上にはピンク色のタンクトップを着て胸の谷間を強調し、下は超短いホットパンツをはいた。そして、かなりセクシーな印象のメイクを顔に施し、一枚写メを撮った。

『8月31日、お願ひしますね』

そして、先ほど撮ったセクシーな写メを添えて、もう一度催促のメールを送った。

『了解しました！！ まかせてくださいーーー』

今度は私がメールの送信ボタンを押した0・05秒後に返信が来

た。

ちなみに、セクシーな写メを添えた理由は、ただなんとなくです。
他意はないですし、ましてや悪意や策略など、微塵も含んでおりま
せんので、ご了承ください。

私は病院を後にし、家に帰った。そして、『暗黒豆腐』について自分なりに調べてみた。

『暗黒豆腐』、

それは豆腐店『白角』の商品。その名のとおり黒色をした豆腐である。本来白いはずの豆腐の身も心も黒く染めているのは、主に海草である。詳しいことは企業秘密ということになつていて、味は……どこを調べても「不味い」とか「生臭い」といった評価ばかりだ。私も実際に食べてそう思った。

そんな『暗黒豆腐』だが、そこそこ人気がある。それは何故か？その答えは、『『暗黒豆腐』応援サイト』にあつた。よくよくパソコンで調べてみると、『『暗黒豆腐』応援サイト』と呼ばれるものがいくつも見つかった。そのサイトでは、「どうやつたら『暗黒豆腐』をおいしく食べられるか？」という議論が交わされており、『暗黒豆腐』を用いたレシピが多数紹介されていた。

そう、『暗黒豆腐』にそこそこ人気がある理由、それは豆腐 자체のおいしさや面白さが要因ではなく、不味い『暗黒豆腐』をどうとかしておいしく食べようと努力する消費者にあつたのだ。消費者達が互いに知恵を出し合つてレシピを考えたり、考えた料理を実際につくつて食べた感想を話し合つたりする。そして、消費者が育っていく豆腐、それが『暗黒豆腐』だったんだ。

ここで何故『暗黒豆腐』をおいしく食べようと努力する消費者達が現れたのか？ という疑問が浮かんだ。だつて、他においしい食べ物が溢れている現代、不味い食品をおいしくする努力をしてまで食べる必要はないと思うから。私はその疑問を解決したくて、さらに調べた。調べているうちに、私は『『暗黒豆腐』応援サイト』の中から、『暗黒豆腐』誕生逸話の記事を見つけて、読むことにした。

【『暗黒豆腐』を発売する前の豆腐屋『白角』は、繁盛しておらず、泣かず飛ばずな状態であった。店主の安岡吉次郎は野心家で、奇抜な豆腐を作つては失敗して借金を増やしていた。生クリームを練りこんだ『生クリーム豆腐』、辛子明太子を練りこんだ『明太豆腐』、麻婆豆腐を練りこんだ『麻婆豆腐』などなど、一時期、奇妙な豆腐ばかりが店頭に並んでいた。そんな時に『暗黒豆腐』も誕生したのだ。当然『暗黒豆腐』も売れなかつたが、妻のキミ子は「おいしい、絶対に売れるよ」とただ一人、必死に吉次郎を励ましていた。吉次郎は「おう！ 今度こそ、この『暗黒豆腐』で繁盛させてみせる！ それで、お前に楽させてやるよ」とキミ子と約束をしていた。しかし、その約束が果たされる前に、妻キミ子は】

私は、思わず画面をスクロールする手を止めた。『暗黒豆腐』誕生の逸話。そこには、「不味い」の一言では語れない、理由があつた。ドラマがあつた。人の心があつた。私はそんな裏話を知るうともせず、表面だけを見て、「不味い」と罵声を浴びせたんだ……。

私は自己嫌悪しながら、『暗黒豆腐』誕生逸話の続きを読んだ。

【妻キミ子死後、約束を果たすために吉次郎は売れない『暗黒豆腐』を必死で作り続けた。その必死な姿に心打たれた仲間達が、どうにかしておいしく『暗黒豆腐』を食べられないかと、必死に考

えて、いろんなレシピを考案したことが、この『暗黒豆腐』が売れるきっかけになつたのである】

…… どうか、だから『暗黒豆腐』は不味くても売れるんだ。いろんな人の“必死”がこもつた豆腐だから、売れるんだ。……私は、アイドルとして、“必死”になれているだらうか？

そんなことを考えながら、私はもう一度、深く自分の行動を反省した。

『8月31日、ハルカちゃんと会うことが決定した。お前に拒否権はない。あと2週間とちょっと、お前にはまだまだ指導することがある。だから俺の呼び出しには迅速に対応しろ』

「送信つと」

俺は田中敬一にメールを送り、ハルカちゃんが送つてくれたセクシー画像を見てニヤニヤした。ホットパンツから伸びる、白くて細い足……たまらん！！ ハウっ！ は、鼻血が……。

俺は鼻血を拭いながら欲望のアクセルを全開にし、妄想列車を暴走させた。

「川島列車、発車します！！」

急に、涙がこぼれてきた。俺は、バカじやない。それなりの大学を出でているし、一般常識もある。喜怒哀楽の感情も持つていて、人の心の不思議も知つていて、恋の盲目だって……恋の辛さだって、知つていてる。

ハル力ちゃんはこれっぽっちも、俺に興味なんかない。ハル力ちゃんが想つてているのは、田中敬一だ。そんなの、わかつていて。恋

によって盲目状態に陥っているハルカちゃんに対し、俺がどんなにアプローチしようとも意味がない。路傍の石ころに愛をささやかれても、気持ち悪いだけ。それも、わかっている。わかっているよ！ でもさー、わかっているからといって、それが何だっていうんだよーー！ 路傍の石には路傍の石なりのプライドがあるんだよ！ 最後に笑うのが、石ころだつていいじゃないか。だって、石ころが笑っていたところで、誰も気付かないし、世界に変化をもたらすものでもないのだから。だから俺は、ニコニコ笑う石ころになつてやる。

俺は欲望を抑えることが、世界平和に繋がると思っていた。でも、俺みたいな石ころの、ちっぽけな欲望を叶えたところで、世界に変化など起きはしないのだと思い改めた。

「よし、まずは田中敬一の指導を徹底すべきだな」

俺は策略をめぐらせ、田中敬一へメールを再び送った。

『明日、公園に集合しろー。』

川島君からのメールを見て、私は思わず頭を抱えた。

どうするや、おー。

カエテさんは店長殴るし、川島君は私を束縛しようとするし、8月31日は『暗黒豆腐少女』のデビューライブがあるっていうのにハルカとかいう女と会えつて言つし、つてかそもそも8月31日にライブできるかどうかも怪しくなつてきたし、カエテさん店長殴るし、喫茶『パンヌス』は何故か休業中で使えないし、カエテさん店長殴るし、市役所の仕事も忙しいし、カエテさん店長殴るし、カエテさん店長殴るし、喫茶『パンヌス』のマスターはまだ意識が戻らないし、カエテさん店長殴るし、賄賂をわたしたお客様からゆすられるし、カエテさん店長殴るし、今週のジャンプ買つたら合併号で先週と同じものだつたし、カエテさん店長殴るし……。

「つほおおおああつひーーー！」

私はついに発狂しそうになつた。しかし、寸でのひねりで踏みとどまることが出来た。それは、たくさんある嫌なことを吹き飛ばしてしまえるような、とても良いことがあつたからだ。人間、何か一つでも良いことがあれば、何とかやつていけるものさ。

私はそんなことを考えながら携帯をかまい、嫌なことから逃避した。

「いやー、ハルカちゃん撮影良かつたよ！ さあ、次の収録があるから直ぐに準備してね」

「……はい」

「……最近、かなり仕事が忙しくなってきた。疲れた。眠い。ああ、私はちゃんと歌えていただろうか？ ちゃんと踊れていただろうか？ 自分では120パーセントの力を出し切っているつもりだ。でも、実際はベストパフォーマンスには程遠いことは、自分が一番わかつている。こんな状態で、私はファンのみなさんに『憩い』を届けられているのだろうか？ 私は、このまま事務所の方針に従つて、数だけこなすアイドルのままでいいのだろうか？ 私は、間違っているのだろうか？ 誰か、教えてよ……。」

忙しさの中に身をおいたことがある人なら誰でも思うことなのでしょう。私は自分の歩いてきた道が正しかったと信じることもできず、どんな未来を描けばいいかもわからず、盲目の日々を送つていた。

『大切なのは、君が言う努力を何でもない日常に変えることだよ』

ふと、社長さんの言葉が思い浮かんだ。今の私には、この忙しい日々を当たり前の日常に感じることはできない。嵐のど真ん中にいるときに「今日もいい天気だなあ」なんて言えないよ。

……もし、こんな閉塞的な日々に光が差すとしたら、私にとつて
その光源は社長さんだ。私にとつて、社長さんは光だ。導きだ。あ
あ、はやく社長さんに会いたい。そして、話を聞いてもらいたい。
いっぱい話を聞きたい。

「8月31日に社長さんに会えれば、きっと私は変われる!」

私は妄想的にやつ、確信していた。

「やあ、ハルカきゅん、おつづー!」

私が社長さんのことを想えていると、ふいに男の人に声をかけられた。

はて? どちら様でしょうか?

「やあ、ハルカきゅん、おつつい！」

「この人を2、3度見たことがある。確かプロダクション『わっしょい』のお偉いさんだ。

「お疲れ様です。えつと……」

「ああ、俺のことは“マッキー”って呼んでよー。」

「はあ、マッキーさん……お疲れ様です」

正直、なれなれしくて私の嫌なタイプの人だと思った。

「こ」の前出した新曲、『初恋はナツツの味』聴いたよ。すぐよかつたよん~」

マッキーさんは自然な動きで私の隣に座り、自然な動きで私の肩に手を回した。

「はあ、ありがとうございます」

私は相手がお偉いさんということもあり、肩にまわされた手を無下に解くことが出来なかつた。

「ハルカちゃん、今何歳？」

肩に回された手がスリスリと私の柔肌を擦つた。すじく気持ち悪

かつたけど、我慢した。アイドルという仕事をがんばりたかったから、私は我慢した。

「16歳です

「若いね~

今度は手を握られた。執拗に、ねちっこい、ニギニギされた。胸糞悪かった。でも、私は嫌な気持ちを一切顔に出さずに我慢した。我慢することも仕事だと思うから。アイドルという仕事は、嫌なことを我慢しても、自分の気持ちに嘘をついてでも、しがみ付く価値のある仕事だと思うから。

「マッキーさん……そろそろハルカ次の収録があるので……

マッキーさんのセクハラを見かねたマネージャーさんが、私に助け舟を出してくれた。

「あ？ おまえ俺のこと舐めてんの？」

急いで、マッキーさんの口調がきつくなつた。

「俺がハルカちゃんのスケジュール把握したことでも思ったのか？ ハルカちゃんの次の仕事まで、まだ1時間以上あるだろ？ がよ

「や、そうですが、いろいろと準備がありますので……

マネージャーさんはたじろぎながらも、私のために今一度、マッキーさんに対して帰るように催促してくれた。

「ふん。まあいい。今日のところは帰るところ。それじゃ、ハル力ちゃんまたね~」

3日後、マネージャーさんが急に変わった。理由は教えてもらえたなかった。

暗黒豆腐について調べた翌日、私は豆腐屋『白角』の店長に謝りうと思い、店の近くまで来ていた。

どうやつて謝る? どんな言葉で謝る? 私は昨晩からずっと考えていた。開口一番「すいませんでしたあー」とアントニオ猪木のように叫びながら土下座する? それとも、最初から涙を瞳に浮かべて、「ごめんなしゃーい」って幼女みたいに許しを請う? もしくは、マニスカートを履いて「うつふ~ん。」めんあそばせみたいな感じでお色気謝罪をする?

…… こう風にいろいろ考えた。でも、どれも私のこの謝罪の感情を表現するには力足らずで、うまくいかないと思ったから、これらの案は除外して他の謝りかたを考えた。

「はあー」

結局、私のこの感情をうまく伝える謝りかたなど思いつかなかつた。私は「こうなつたら出たとこ勝負だ！」と思い、ため息をつきながら豆腐店『白角』の前まで来た。

1987

私はコブシに力を込め、意を決して『白角』の店内に入った。

「店長さん、ごめんなさい！」

そして、素直に謝罪の言葉を口にし、直ぐに頭を下げる。これが、
私に出来る最善の謝罪だと思つた。

111

頭を下げる数秒、いまだに私の謝罪に対する返答はない。店長さんは沈黙したままだ。やはり店長さんは怒っているのだろうか？

「お前の言葉など聞きたくない、帰れ！」と言われるのではな
いかと思い、私は怖くて中々顔を上げることができなかつた。

「店長さんが、私としゃべりたくない気持ちはわかりますが……」

私はあまりにも店長さんの沈黙が長いので、おやおやおやおやの顔を上げた。

「あれ？ 店長さんは……」

やうに、世間ではせりなかつた。『ひやう』の説明のやうだつた。

「はあー。なんだよお、気合入れて損した」

私は拍子抜けしてしまい、深くため息をついて緊張を解いた。

「遅いぞー、田中敬一」

予定よりも30分遅れて、田中敬一が公園にやってきた。

「じめん川島くん」

「その“川島くん”って言ひのやめりー、おまえこそひまわれると
気持ち悪いんだよー」

「でも、私達は大学からの“友達”といひ設定なのだらうへー」

「……そただけど、それはハルカちちゃんと一緒にいのときだけでいいんだよー、俺と一人の時はその呼び方やめる」

「つむ。それもそただな。私も氣色悪いと思つてた。今日から
“貴様”と呼ばせてもらおう」

「おまえ、自分の立場わかつてんのか？ 豚箱に放り込むぞ、この
豚野郎ー！」

「じゃあ、何と呼べば良いのだ？ ゼひ、レクチャーしていただき
たいのだが？」

「俺のことば“川島さん”と呼べ。わかつたな？」

「……川島よん」

“ よん ” じゃない！ “ ゃん ” だあ ！」

「 川島こち、に、せん、だあ ！」

「 いいかげんにしろ…… だまつて俺の書いたおつにしろ…… こんなちくしちゃう…… 」

……とまあ、こんな不毛なやり取りを俺は田中敬一と30分ほど続けた。

「 お？ すまん、川島殿。メールが来たので、少し黙つてくれるかな？」

結局、俺の呼び方は“ 川島殿 ” で落ち着いた。多少は「 ちりも讓歩しないと、この男との会話に終わりが見えなかつたから、じょつがない。 」

『これから豆腐屋白角の店長に謝るひつと思つんだけど、何かアドバイスくれない？ 勢いで謝るひつと思つていたんだけど、間があいちやつて、不安になつてきたの』

私はカエデさんからのメールを見て、ほほえましい気持ちになつた。あのカエデさんが素直に謝るひつと決意したこと、嬉しく思つた。私は直ぐに返信しよつとした。しかし、

「おい！ 田中敬一、これからおまえに俺とハルカちゃんの仲を取り持つてもううための作戦を叩き込む」

川島殿はそれを許してくれなかつた。

「川島殿、メールを返信してからじゃダメかね？」

「ダメだ」

「……わかつた。それじゃ、手短に頼むよ」

川島殿の目は鋭く、怖かつたので私は抵抗することをあきらめた。まったく、恋に溺れた男ほど、怖い生き物はない。自分より大切な何かを見つけ、それを手にするために自分を投げ捨てるとの出来の人間ほど、恐ろしいものはない。

「うん、素直でよろしい。まず、ざっくり言つとだな、お前の役目は“撒き餌さ”だ。残念なことだが、ハルカちゃんはお前に惚れて

いる。そんな状況で、無理に俺のことをアピールしても意味がない……」

川島殿は少しあびしそうな表情でうつむき、黙り込んだ。はやく話を切り上げたかった私は、この無駄な沈黙を破るように言葉を発した。

「要は、そのハルカとかいう女に私が嫌われるようになれば良いのだろう？ そして、川島殿のことをアピールすれば良いのだろう？ それで問題ないだろう。私が恋のキューピットになつてやるつ」

私の言葉を聞いた川島殿は顔を上げ、あきれた顔でため息をついた。その顔を見て、私は少しイラッとした。

「お前、俺の話聞いていた？ お前は“撒き餌”だつて言つただろ？ いいか、ハルカちゃんがお前のこと嫌いになつたら、俺はどうなる？ その風通しの良い頭で考えてみ？」

川島殿のこの発言には心底イラついた。しかし、私は低俗な人間のように、バカみたいに怒鳴り散らることはせず、あくまでも冷静に対応した。

「用済みだな。だつて、そのハルカとかいう女は私と会うために川島殿を利用しているだけなのだから。私という餌がなければ、君みたいな凡人に対して、アイドルが興味を示すわけがない」

私はこのとき、殴られる覚悟をしていた。というか、あえて川島殿が怒りに身を任せて私のことを殴りたくなるような言葉を吐いたのだ。怒りに身を任せて暴力を振るうことでしか、暴れる感情を制御できない低俗なヤツだと、見下してやるつと思つたのだ。そのた

めには、数発殴られる痛みぐらご我慢してやうやく。やがて、思つてい
たのだ。

「やうだな。その通りだ。だからお前には、適度に”ハルカちゃん
の興味を引き続けてもらいたい。ハルカちゃんが俺と連絡をとらな
ければいけない状況を常に作り出す、”撒き餌”になつてもらいた
い」

しかし、川島殿は冷静だった。その、あまりに冷静な川島殿の態
度に、私は心底戸惑つた。きっと川島殿は私の発言に對して怒り、
衝動に身をまかせて私に殴りかかつて来ると思つていた。だから私
は思わずキョトンとしてしまい、言葉を失つた。

「……田中敬一、お前はまだ、本氣で恋をしたことがないのだろう
？　お前に良いことを教えてやる」

川島殿はキョトンとした私の心中を察したのか、淡々と語りだし
た。

「恋を成就させるには必要なことが2つある。一つは常にしたたか
でこること。そして、もう一つは、熱い情熱を同時に持ち合わせて
いることだー」

そう言つと、川島殿は思いつきり私の顔をぶん殴つた。完全に油
断していた私は、殴られた勢いのまま地面にじりもむをついた。

「あわわわわ……」

私はあまりの衝撃に、「あわわわわ」と言つてしかできなかつ
た。

「何してんだあ、オメエ！」

私がふけさんからのメールを待つていると、不意に後ろから声をかけられた。

「あ、あ、あわわわわ

私がおそるおそる振り向くと、そこには店長さんがいた。店長さんの顔にはまだ、私が殴った後があり、薄つすら赤く腫れていた。私はあまりに突然のことでの、しかも店長さんの口調が怒っているようだったので、なんと言つて良いのかわからず、「あわわわわ」と言つ」としかできなかつた。

「あれ？ なんでえ、カエテちゃんじやないの？ 泥棒かと思つたよ。何しに来たの？」

どうしよう！？ 謝らないと なんて言えぱーいの？ そうだ、とりあえず頭を下げなくちゃ いや、やっぱりこには十二座か？ 私がそんなことを考えながらアタフタしていると、店長さんは田を丸くしながら私のことをマジマジと見た。

「その動き、デビュー曲のダンスかえ？ もじろい動きだねえ。わざ、そんなところに突つ立つてないで、こつこお座りよ。今お茶だすからね」

店長さんは私の顔を見て怒るどころか、隠さずに笑っていた。

「お、怒つてないんですか！？」

私は鳩が豆鉄砲くらつた様な顔で驚いた。怒つてない？ 何故？ 理不尽に殴られたのに、なんで怒つていのいの！？

「なんのこと？」

店長さんはとぼけた顔で、お茶を入れていた。

「あ、昨日、店長さんを、殴つてしまつたこと……」

「ああ、昨日のこと？ いやー、人に殴られたのは久しぶりだったなあ」

店長さんは世間話をす るよ うなテンションで「ガハハ」と笑つて いた。

「ほれ、これ食つてみんしゃい」

そして、唐突に店長さんは私に黒い豆腐を差し出した。

「これは……」

昨日あれほど不味いと言つた暗黒豆腐を今出してくると「う」とは、これは私に対する嫌がらせだらうか？ にこやかな顔をしているけれど、やっぱり腹の中は私に対する憎悪でいっぱいなのだろうか？

「いただきまーす」

いろいろな考えが私の頭に錯綜したが、私はとりあえず差し出された黒い豆腐を食べることにした。

「モグモグ……あれ？ うそ！？」

私はまたもや驚いた。あんなに生臭かつた暗黒豆腐の臭味くわみが、キレイサッパリなくなつていたのだ。

「どうでえ？ 昨日カエデちゃんに『生臭い』って言われて、殴られただろ？ そのとき、思つたんだあ。周りの人の好意に甘えて、不味い豆腐を作り続けるのはダメだつて。調理をしなくともおいしく食べられる暗黒豆腐を作りつゝてな。カエデちゃん、ありがとな

急に、涙が出てきた。私のことを怒るどころか、私に感謝をしてくれた店長さんの気持ちが嬉しくて、涙が止まらなかつた。

「で、味はどうでえ？ 美味いかえ？ 昨日徹夜で作つたんだけどお……」

店長さんは味の感想が気になつてゐるらしく、私の涙など気にも留めず聞いてきた。私は服の袖で涙と鼻水を拭い、答えた。

「生臭さはなくなりましたけど、不味いです」

店長さんは頭を抱えて「あちゃー！」と言つてゐた。私はそんな店長さんのしぐさを見て、腹を抱えて笑つた。ほんと、涙が溢れて止まらないほど、心の底から笑つた。

「あわわわわ……」

川島殿は、相変わらず「あわわわわ」としか言えない私に歩み寄ってきた。正直怖かつたが、今の私には「あわわわわ」と言いながら小刻みに震えることしかできなかつた。

「いいが、田中敬一。恋を手に入れるためにはなあ、“決意”する必要があるんだ」

川島殿は私の田を睨みつけながら、恋のレクチャーの続きを話しがめた。私は「あわわわわ」と言いながらその話に耳を傾けた。

「他の人間を不幸にする決意をなあ！　お前は今、非常に不幸だろう？　俺に殴られるわ、知らない女とデートするはめになるわ、散々だよな？　でもな、俺がこの恋を成就させるには、お前を利用する必要があるんだよ。わかるな？　お前の不幸の上に、俺の幸せが成り立つんだよ。だから、お前を不幸にしてやるー！」

川島殿は非常に理不尽な理由で『私のことを不幸にしてやる宣言』をした。私はあまりの恐ろしさに、さらに小刻みに震えた。

「…………と昨日決意したんだけどなあ、やつぱり俺には無理だつたよ」

急に、川島殿の雰囲気がやわらかくなつた。先ほどまでの怒氣は消え去り、非常に穏やかな顔をしている。

え！？ いつたいど「ひこ」こと…？

あまりに急激な感情の変化についでいげず、私は非常に困惑した。

「田中敬一、殴って悪かったな。やつぱり、他人の不幸の上に俺の幸福はない。今、あらためてわかつたよ。お前のおかげだ、ありがとう」「ひ

さつきまで怒っていたのに、俺のことを殴ったのに、今度は急に謝りだした……こいつ頭おかしいんじやないか？ 情緒不安定すぎるだろう！ と思しながらも、私は相変わらず「あわわわわ」とか言えなかつた。

川島殿はさういつづいて、今度は土下座をし始めた。

「お前には、ほんとうに悪いことをしたと黙っている。もひ、お前を束縛するつもりはない。ただ、最後に一つだけ俺の願いを聞いてくれないか？」

川島殿はさういつづいて、今度は土下座をし始めた。

「おじおじ、今度は何だよ…？ 勘弁してくれよー！ 私はさう思ひながら「あわわわわ」とうなついていた。

「ハルカちゃんとデートしてやつてくれ！ 頼む。お前がハルカちゃんのことなんとも思つていらないのならそれでもいい。ただ、ハルカちゃんを楽しませてやつて欲しい。ハルカちゃんを傷つけないでやつて欲しい。これは俺のわがままだ。ハルカちゃんが望むことでもなんでもない、ただの俺のエゴだ。お前にとって何のメリットも

なことはわかっている。でも、そこを何とか、頼む… お願いだ！ 一日だけでいいから、ハルカちゃんの『社長さんに会いたい』とこつ願いを叶えてやつてくれ…』

川島殿の土下座には、言葉では表せない気迫がこもっていた。私はその気迫に押され、思わず「わ、わかった」と頷いてしまった。

「ほ、ほんとうか…？ ありがとう、ありがとう…」

川島殿は、何度も何度も「ありがとう」と言しながら泣いていた。……つたぐ、泣きたいのはこつちだつての… こつむけお前に殴られてんだぞ！ こんちくしょう…

私はそんな風に心の中で悪態をつきながらも、この川島といつ男は悪いやつではないと思った。自分のことだけを考えて恋すればいいのに、周りのことまで考えて恋をしようとする、このバカな男のことを、私は嫌いではない。

この日、私と川島くんの間に奇妙な友情が生まれた。

『8月31日、社長さんと会えるよ。良かつたね』

川島さんから届いたこのメールを読んで、私は嬉しいのあまり飛び跳ねた。

やばい！ 嬉しい！ 心臓がバクバク鳴っている！

今日もダンスレッスンにテレビ収録と忙しかったけど、一気に疲れが吹き飛んだ気がする。ああ、8月31日が待ち遠しい。残り10日かあ、はやく来ないかな。

「ルンルンルン」

私は鼻歌を歌いながら、カレンダーの8月31の空欄にハートマークを書いた。そして、いろいろと妄想した。会つてすぐに何て言おうかな？ 社長さんはどんな話に興味があるんだろう？ どんな服着ていこうかな？ 社長さんはどんな服が好みなんだろう？ お昼は何を食べようかな？ 社長さん何が好きなんだろう……

次々と浮かんでくる疑問があまりにも多くて、私はこのままじゃまずいと思った。

「……やっぱり、川島さんから社長さんの細かい情報を聞いておくべきね」

そう思つた私は感謝の言葉を添えて、川島さんにメールを送つた。

俺は家で一人、いろいろと考えていた。

今日、俺が殴った後、田中敬一が絶望したような顔で「あわわわわ」と言つてゐる姿を見て思つた。

“俺は一人の人間を「あわわわわ」としか言えない様な状況に追いやるためにまで、恋がしたいのか？”

答えはNOだった。だから俺は、ハルカちゃんのことをあきらめよつと思つた。でも、やつぱりあきらめたくないといつ気持ちもあって、心の葛藤に決着をつけることができずにいた。

「よし、決めた。おれはやつぱり……」

しかし、夜もふけてきた頃、よつやく俺は心の葛藤に決着をつけることができそうになつた。

そんなとき、ハルカちゃんからメールの返信が来た。

『川島さん、ありがとうございます。お礼と言つてはなんですが、明日、ランチご一緒しませんか？ 仕事の合間なので、あまり長居はできませんが、どうでしょうか？』

ハルカちゃんからのメールは、嬉しくもあり、悲しくもあり、俺はとても複雑な気持ちになつた。

今さつき、ハルカちゃんのことをあきらめようと決めたのに。強がるのはやめて、恋に臆病でへタレな自分のまで生きて行こうと思つたのに。自分のことだけを考えて生きるのをやめて、周りの人のことと一緒に懸命考えて生きようと決意したのに……。

ハルカちゃんの何気ないメールは、俺が必死に考えて考えて考え抜いた決意を、簡単にゆらしてしまつ。まるでジーンガで遊ぶように、グラグラと。その行為に悪意など一切存在しない。でも、それが一番怖くて一番辛い。それが一番、人を傷つけることがある。そんなことを思いながら、俺は頭を抱えて必死に考えた。

”俺はどうしたらいいのだろうか？”

”ハルカちゃんのことあきらめると決意した矢先、ハルカちゃんに会つてびつかる？”

”ここは会わないべきだろ?”

”でも、会いたい”

”利用されるだけでもいい。それでもいいから、会いたい”

”でも、俺のこの望みの果てには、他人の不幸がきつと存在する

”……”

俺はグラグラとゆれる弱い意志と必死に戦つた。どう行動すべきか必死に考えた。自分のこと、ハルカちゃんのことを考えた。さらに、田中敬一のこと、俺の両親のこと、ハルカちゃんの両親のこと

と、ハルカちゃんのファンのこと、ハルカちゃんのマネージャーのこと、ハルカちゃんの仕事のこと、俺の仕事のこと、世界紛争のこと、世界平和のこと……とにかくこんなことを考えた。

本当は、恋といつもの自分のことだけ考えてあるものなのだろう。それなのに俺は、自分のことだけを考えることはできなかつた。ついには、世界のことまで考えて恋しそうとしていた。こんな俺に、やつぱり恋は無理なのだろうか？

俺はいろいろと悩んだ挙句、メールを返信した。

『“謝罪”は“告白”と同じです。

過去の状況に戻し、何事もなかつたことにしようといつ、後ろめたい行為ではありません。自分の望む未来を掴むための、勇気ある行為です。変化を恐れず、好きな人に告白する様な気持ちで、謝罪してみてください。では、健闘を祈ります』

『豆腐屋『白角』の店長さんとの関係も良くなり、楽しく店長さんと雑談しているときに、ふけさんからメールが届いた。その内容は、謝罪に関する私へのアドバイスだった。

……遅いよ！ もう謝罪し終わつたつーの！

私はタイミングの悪いふけさんに対し、怒りと感謝を込めてメールの返信をした。

「さてと、私そろそろ帰りますね」

そして、帰り支度をした。

「もう帰るのかえ？」

店長さんは名残惜しそうな顔をしていた。

「すいません。私、なんだか今とても良い“気持ち”なんです。この“気持ち”を文字にすれば、きっといい歌詞が書けると思うんです。だから、この“気持ち”が冷めないうちに、家に帰つて歌詞を

書きたいと思います」

「やつかえ、良い歌詞が書けるとええね。それじゃ、お土産に『暗黒豆腐』を持つていきなさい」

「けつじゆでや」

私は冷徹な態度でお土産を断つ、直ぐに『豆腐屋』『豆腐』から出た。

「トピューライブ、楽しみにしてるでね」

店長さんは悲しい顔で私のこと見送ってくれた。

家について直ぐ、私は机に向かい、歌詞を書いた。ここ数日間で私が学んだこと、気付いたこと、思ったこと、失敗したこと、すべてを込めよう。

私はそう思いながら、時が経つのも忘れるほど集中した。

『アドバイス遅せーよ！このタコスケが！もう店長さんに謝つたちゅーの。でもまあ、ありがと。一応感謝はしています。店長さん、『暗黒豆腐少女』のスポンサー続けるって言つてくれたよ。だから、8月31日の『レビューライブ』、がんばろうね。あと、歌詞はまかせて。絶対いい歌詞書いてみせるから』

私が家に着いた頃、カエテさんからメールが届いた。びりやん、ちゃんと謝罪できたようだ、よかつた。

私はそう思いながらも、罪悪感でいっぱいだった。8月31日は、ハルカという女とデートをしなければいけない。川島君と約束してしまったのだ。だから、カエテさんの『レビューライブ』には、いけないんだ……。」めん。

私は心中で何度もカエテさんに謝罪した。

「プルルルル　プルルルル」

突如、携帯電話が鳴つたので、私は画面を確認した。画面に映し出された名前を見て、私は思わずにやけてしまつた。

「もしもしー　はい、はい……明日……ランチ？　おいしいイタリアン？　もちろんOKです！　楽しみにしています」

そして、少し高いテンションで電話越しの会話を楽しんだ。

【タイトル：地獄の愛は煮えたぎる

私の心は真っ暗で まるで暗黒豆腐の様
あなたのせいよ わかつているの?
もういいわ 死んで頂戴 地獄へ落ちろ

go to hell go to hell

地獄の業火で豆腐を茹でろ

go to hell go to hell

おいしい湯豆腐召し上がり

マグマの池で頭を冷やしたら 地獄の花を摘んできて
それで許してあげるから 必死になればできるでしょ?

go to hell go to hell

もつと必死に愛しなさい

go to hell go to hell

軽い愛は欲しくないの

地獄より熱い愛で 私を抱きしめて
あなたの腕の中 溶けてしまいたいの
それだけが望み それだけでいい
だから 私を愛しなさい

go to hell go to hell

地獄の業火で豆腐を茹でろ

go to hell go to hell

おいしい湯豆腐召し上がり

私の心は真っ暗で まるで暗黒豆腐の様

それを照らせるのは あなただけ

それだけは わかつていてね チュー（投げキッス）】

私は感情の赴くままに、この歌詞を完成させた。

……おかしい、私がここ数日間で学んだことや感じたことを表現しようと思ったのに、なんかよくわからんへンテコリンな歌詞が出来てしまった……。

「やっぱり、“気持ち”というものを文章で表現するのは難しいや。せっかく、この気持ちを伝えることができれば、人の心打つことができると思つたのに。人々を魅了することができると思つたのに……。つまく文章にできないや」

私はそんな独り言を呟いた。

そもそも、たかが数日でスバラシイ歌詞を書けるようになるのであれば、だれでもプロになれる。正解がわかつても、それを表現できる技術がなければ意味がない。やっぱり、私にこの曲にあう歌詞を書くのは無理だ。

私はそう思つた。そして、いつもならここであきらめていたと思う。けれど、今の私は前とは違う。

「……でも、私はアイドルだ。足りない分は歌やダンスで表現すれ

ぱい！」

もし仮に、文字だけで全てを表現できるなら小説家になればいい。でも、私が目指すのはアイドルだ。アイドルは歌詞だけじゃなくて、歌声やダンスでいろんなことを表現する職業だ。だから私はもう、スバラシイ歌詞が書けないことを嘆くのはやめる！　歌詞だけじゃ足りない分を、歌とダンスでおさなつてみせる！

それが、プロのアイドルだと思つから。創り手が表現できない部分を変わりに表現する。それがアイドルという仕事なんだ。

「ぐぬぬぬぬ……」

突如、腹がなつた。あまりに集中していたため、夕飯を食べ損ねていたことに、今気がついた。

「歌とダンスの練習がんばり！」

私はそう思いながら、腹いっぱい飯を食つた。

川島君に殴られた日の翌朝、私はカエテさんに呼び出された。本來なら喫茶『パンヌス』に集合するのだが、今はマスターが意識不明で開店していないので、近くのファミリーレストラン『べそ』を使用した。

「じめん、ちつと遅れた」

午前9時ごろ、私よりも数分遅れてファミレス『べそ』にやつてきたカエテさんは、席について直ぐ、「歌詞できた」とそつけない態度で言いながら、一枚の紙切れを渡してきた。

私はその紙切れに書かれた歌詞を読み、沈黙した。

「…………」

正直、なんと感想を言えばいいかわからなかつた。

この歌詞は、良いのか？ それとも悪いのか？ 全くわからなかつた。『暗黒豆腐少女』の雰囲気は出ていると思うけど、この歌詞は少しづつ飛びすぎじゃないか？ いや、でもこれくらいぶつ飛んでいるほうが、案外受け入れられるのだろうか？

「…………。一生懸命考えて書いたんだけど。ちゃんと『暗黒豆腐』も歌詞の中に入れたし……ダメかな？」

カエテさんは非常に自信なさそうな顔で、私に感想を求めてきた。

「うーんと……えつと…… そうだねえ……」

私は上下左右に田玉を激しく泳がせた。きっと、この速度で泳げば、水泳自由形の世界記録が出るだろ？。そう思えるほどすばやく、私の目はキヨロキヨロと動いた。

正直、下手なことを言つてカエテさんを傷つけたくなかつた。しかし、テキトウなことを言えば直ぐに嘘だと見破られてしまう。あ、なんと言えばいいのだろうか。わからない……。

私がそんなことを「じちや」「じちや」考えていると、カエテさんは強い口調で、静かに語り始めた。

「……わかってる。ダメなのは、わかってるんだ。でも、大丈夫。私が、足りない分は、歌とダンスでおぎなうから。歌詞で観客を魅了できないなら、歌とダンスで魅了すればいい。ふけさんも、そう思うでしょ？」

彼女の黒くて強い目に、思わず吸い込まれた。私の目は泳ぐのを止め、漆黒の瞳に向かって、静かに溺れた。

私が川島くんとくだらないやり取りをしている間に、女に現を抜かしている間に、喫茶『パンヌス』のマスターの首を絞めている間に、カエテさんはアイドルとして成長していたのだ。

一人の少女の成長を、こんなに間近で感じられたことに、私は純粋に感動した。それと同時に、成長の瞬間にそばにいられなかつたことを後悔した。“瞬間”を見逃したこと……すごく残念に思つた。

「わかった。この歌詞で行こう！」

やつぱり、私の目に狂いはなかつた。彼女は眞のアイドルだ。絶対に、彼女をプロデュースしてみせる。

「この日、私は改めてそう思つた。

64 ハルカ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが。ご了承ください。

「ハルカさん、おはようございます」

私の新しいマネージャーは、とてもスタイルが良くて、とてもキレイな人だった。

名前は高橋未実たかはしみみ、私は“未実さん”と呼んでいる。未実さんは控えめな性格で、品のある人だった。でも、声に霸気がなくて、弱々しかつた。しかも、笑顔がへたくそで、まるで顔面麻痺のようだった。

「未実さん、そんなに引きつった顔で笑わないでください。怖いです」

「ああ……すいません。私昔から、笑顔がへたくそで……」

そう言つと、未実さんはうつむいてしまつた。こんなにキレイなのに、こんなに根暗だなんて、もつたいない人だなあ。

「それで、今日のスケジュールはどうなつていますか？」

「あ、はい！ ちょ、ちょっと待つてくださいね」

そう言つと、未実さんは手帳を開くことなく、直ぐにスケジュールを教えてくれた。全て暗記していたのだろうか？

「……わかりました。ありがとうございます。ところで、今日のお

昼に、お友達とランチをしたいのですが、現場を抜けても大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫ですよ。今日のスケジュールでしたら、2時間ほどであれば問題ありません」

「それでは、お昼2時間ほど抜けますので、よろしくお願ひしますね」

「あ、はい。あの、実は私も、今日のお昼……」

「すいませーん。マネージャーさんいますか？」

突如、未実さんが細い声を搔き消すように、若いディレクターの人がやってきた。

「ちょっと来てもらいます?」

そして、「ああ、ああ」とうなつてている未実さんの腕をつかみ、乱暴に連れて行つた。

「ふうー……未実さん大丈夫かな?」

一息ついた私は次の撮影が始まるまで休もうと思い、ソファーに座つた。

「ん? これは?」

ソファーの前にある机に、一冊の雑誌が置いてあった。その雑誌には『夏のグルメ大特集!』と書かれていた。この部屋には私と未

実さん以外いなかつたから、未実さんか置いていったのかな？

「わあー、おこしゃべー。」

私は暇つぶしがてらこの雑誌を読んだ。

「おー、ここのイタリアンのお店おこしそうだなあ。よし、今日の川島さんとのランチはここにしてようかな」

私はここのとんでも、ここのページの端つじが折れているここと、気付かなかつた。

「ふけさん、このあと暇？ レッスン手伝って欲しいんだけど」

私達は歌詞の話を終えてから、衣装のことやデビューライブ当日のスケジュールについて話をした。その話の後、午後からダンスのレッスンをしようと思っていたので、ふけさんにも手伝ってもらおうと思い、何の気なしに誘った。

「えつ！……ちよ、ちょっと午後は仕事があ、あうつ！ あ、あるんだ……」

「ん？ 何で最初に「えつ！……」って言った？ なんで、そんなにしどりもどりなの？ 何で途中「あうつ！」って舌を噛んだの？
……怪しい。こいつ、何か隠しているな。

直感でそう思つた私は、カマをかけてみた。

「このあと、誰とデートするの？」

「ほへえ！？」

ふけさんの目が、ものすごいスピードで泳ぎだした。ビンゴだ！
こいつ、仕事じゃねーな。このあと誰かとあうんだ。

「……どんな人？ 美人？」

「は、はははは……は？ し、仕事だって、言つただろう？ そん

な、で、『テートなんて……せせせ……せは？』

しかも相手は女だ！……『んちくしょう、私がダンスや歌のレッスンをしている間に、『テートするつもりだったのか！』もしかしたら、今まで仕事があるから忙しいって言っていたのも嘘だったのか！？……許せん。この男、許せん！

「そ、それじゃ。私はもう帰るから。レッスンがんばってえ～」

そう言つと、ふけさんは直ぐにファミリーレストラン『べそ』から逃げ出した。

「あ、ちよ、ちよつと……嘘つくなあ……！」

私はこのとき、心底イラついた。ふけさんが仕事サボつて『テート』することに反対してじゃない。ましてや、私に嘘をついたことに対してもない。

私がイラついたのは、私以外にふけさんのことを持てする人がいたということだ。それは、私がふけさんを魅了できなかつたということ。

他の誰も目に入らないほど、人を魅了できなければ、アイドルとしては力不足。その現実を突きつけられた気がして、心底イラついた。

65 カエテ（後書き）

久しぶりの更新になりまして、申しわけありません。
書いているうちに最初に想像していた結末と変わりそうなので、少し更新スピードが落ちるかもしれません。
ご了承ください。

「はあー……」

俺はため息をつきながら、ハルカちゃんに指^さ定されたイタリアンの店『天使のお零^{じゆ}れ』へと向かつていた。

ハルカちゃんのことはあきらめると決めたのに、結局、ハルカちゃんのランチの誘いを断ることができなかつた……。

「えーっと……こここの店かな？ うーん、結構高そうだけど、大丈夫かな？」

イタリアン『天使のお零^{じゆ}れ』について直ぐ、俺は予算が心配になり財布の中身を確認した。財布の中には諭吉さんがいたので、俺は少し安心した。

「さてと、ハルカちゃんはまだかな？」

俺は店内を確認したが、ハルカちゃんの姿はなかつた。どうやら、先に来てしまつたようだ。さて、どうしようか。店の中で待とうか、それとも外で待つていようか……。

俺はそんなことを考えながら、ふと前を見た。すると、そこには一人の少女がいた。少女は草陰に隠れて、じつと何かを観察しているようだつた。

何だあの子は？ 何で隠れているんだ？ 探偵か？

不思議に思ったので、俺は少女の田線の先を追つてみた。

「あー、お、お前、なんでここにいるんだよー。」

そこには、何故か田中敬一がいた。

「おー、やあ、川島くん。奇遇だね、こんなところド」

田中敬一の進行方向の先には、イタリアン『天使のお零れ』^{ハーフ}と、イタリアン『天使のお零れ』^{ハーフ}と、俺はなんだか嫌な予感がした。

「お前、もしかして、このイタリアン『天使のお零れ』で食事するつもりじゃないだろ? うな?」

「へ? そうだけど。それが何か? ふふふ。聞いて驚くなよ、
実は今日、デートなんだよ。」

「デート! まずはいぞ、これからハルカちゃんがここに来るのに、
田中敬一と他の女のデートシーンをハルカちゃんが見てしまったら
……。」

俺は最悪の事態を想像し、血の気が引いた。

「お前、と、とりあえず、えっと……だなあ……つーん」

俺はどうしていいのかわからず、焦った。とりあえず、田中敬一には店を変えてもらうか? それとも時間をずらしてもいいとか? いや、まずハルカちゃんにメールをしてだな……。

俺がいろんなことを『チャチャ』と考えていのつひー、時間はどんどん過ぎていく。

まざい、もうハルカちゃんが来る時間だ。

そう思つた俺は前方を確認した。すると、遠くのほうにハルカちゃんの姿があつた。

「おい！ 田中敬一！ 事情は後で話すから、とりあえずついてこい！」

俺はハルカちゃんに見つかる前に、田中敬一の手を取つて、イタリアン『天使のお零れ』^{じは}から逃げ出した。

「うそ…………」

私はショックを隠しきれなかつた。

ファミリーレストラン『べそ』からふけさんが逃げ出した後、私はふけさんの後をつけていた。デートの相手がどんな女か見てやろうと思ったのだ。しかし、ふけさんのデートの相手は女性ではなく、男だつた。

「ふけさんつて……ホモ！？」

私は草陰に隠れながら、ふけさんが謎の男と楽しく談笑し、手と手を取り合つて走り去つていく場面を目撃した。これはもう、確定的な証拠だらう。

あいつは、ホモだ！

でも、までよ……。ということは、私はあの“男”に負けたといふことか!? 私の魅力は、あの“男”以下ということかあ!!

美人な大人の女性に負けたのならまだ、納得できたかもしれない。私はどちらかといえばかわいい系だし、まだ若いから大人の魅力もないし。でも、ふけさんを魅了した相手が男だ何て、許せない。私が男以下なわけがない!!

私はさらにイライラした。このイライラ、どうしてくれようか。

そんなことを考えていたとき、私の目に一人の女が映った。

「あ！ カシユーナツツ！……」

私はイライラを忘れて、思わず叫んでしまった。私の目線の先には、アイドル『カシユーナツツ』のハルカがいたのだ。

「あ……あなた、もしかして、栗山カエテさん？」

「う、ええ！？ な、なんで私の名前知っているの？」

私は心底驚いた。なんで、今話題の新人アイドル様が、まだアイドルとしてデビューもしていない私の名前を知っているの？

「そうだ、カエテさんだ！ 私、あなたにすごく感謝していたの。本当にありがとうございました。あなたのおかげで、私はアイドルになれたの」

「は、はあ……」

しかも、何故か感謝されているし……。いつもはあなたにオーデイションで負けて、ライバル視していたのに……なんか拍子抜けしちゃつたじゃない。

「あら？ カエテさん、ちょっとめんなさい。電話だ」

そう言つと、ハルカは電話に出た。

「……はい。はい、急用ですか……。変態？ はあ……そうですか。それじゃあ、ランチはまた今度ですね。いえいえ、こちらは大丈夫ですから。そんなに謝らないでください。ええ、それじゃあ、失礼

しますね

電話を終えたハルカが、急に私の顔を見つめてきた。

「な、なによ」

悔しいけど、その顔はとてもかわいくて、やつぱりこの子はアイドルとしての才能があるなあ、と思ってしまった。

「もし良かったら、ランチと一緒にしません?」

「おい！ 痛い！ いい加減手を離せーーー！」

私は川島君の手を振り解き、怒りをあらわにした。

「こいつたいてどうこいつもりなんだ！？ そんなに私のデートが気に食わないのかー！」

「はあ、はあ、はあ……すまんすまん。ちよつと、今から電話するから、もうちよつと待つてくれ」

そういひつと、川島君は私のことを無視して電話をかけ始めた。

「ムキー！ 私を無視するなあーーー！」

「あ、ハルカさんですか。すいません、実は急用ができまして……はい、実は変態が町で暴れています……」

「おーー！ 変態つて私のことかあーーー！ 訂正しろーーー！ て・い・せ・い・し・ろーーー！」

「……はい、すいません。また、今度お願ひします。すいません、すいません、すいません……」

川島君は電話越しに何回も土下座して謝っていた。川島君、君のその美しい土下座姿は、電話の向いの人に見えていないのだよ。

「さあ、そろそろ事情を説明してくれてもいいんじゃないかい？君は私のテープを潰してしまったのだよ。もし、くだらない理由だつたら、怒るよ」

「……ああ、悪かったな。実は……」

川島君は、地面にこすり付けて赤くなつた額をさすりながら、つらつらと事情を話し始めた。

「おいしいですね」

「…………モグモグ」

「『』のお店、結構有名みたいですよ。『天使のお零れ』って、なんだか変な名前ですよね」

「…………モグモグ」

カエデさんは、ずっと無言でこの店一番人気の『天使の涎パスタ』を食べていた。気のせいだろ？ ずっと私のことを睨んでいる気がするのだけれど……。

「カエデさんは、何でアイドル『カシューナッツ』のオーディション、受けたのですか？ 他にもいっぱいアイドルのオーディションあるじゃないですか……」

私は話題がなかつたので、テキトウに思いついたことを口にした。すると、カエデさんは急に食べるのをやめて、先ほどよりもさらに鋭い目で私のことを睨んできた。しかも、その目からは怒りが感じられたので、私は「何かまずい」と言つてしまつたのかしら？」と不安に思つた。

「あなたはいいわよね。合格して、今話題のアイドルとして輝いているんだから。私はね、アイドルになるのが夢なの。小さいときからずっと、ずっと、ずっと！ アイドルに憧れていたの。アイド

ルになることが私の全てだつたの！……だから片つ端からアイドルオーディションを受けていたのよ。『カシュー・ナッシュ』のオーディションもその一つ。『ご覧の通り、すべて落ちていますけど？　あんたみたいに、合格できませんでしたけど？　悪い？』

私はどうやらカエデさんの逆鱗に触れてしまつたらしく、カエデさんは非常に興奮しながら言葉を発していた。

「ああ……す、すいません……軽率な質問をしてしまつて……」

私は必死にカエデさんをなだめようとした。しかし、カエデさんの熱は一向に冷める気配がなく、私は困つてしまつた。

「どうしよう……。

「あれ？　ハルカさんも」のお店でランチだつたんですか？」

私が困り果てていると、突然マネージャーの未実さんに話しかけられた。何で未実さんがこの店にいるのかわからないけど、助かつた。ここは未実さんに助けてもらおう。

そう思つた私が、未実さんに事情を話さうとしたそのとき、カエデさんが急に叫びだした。

「ああ……！　あ、あ、あ、う、占いアイドル『クリスタル』の『//』さんだああああああああ……わ、私大ファンなんですう……！」

そして、私のマネージャーである未実さんに、抱きついた。

「……というわけで、ハルカちゃんにお前の『デートを見せるわけにはいかないんだ。悪いけど、場所を変えてくれないか?』

俺は素直に事情を話し、田中敬一に頭を下げた。

「うむ……」と解した

田中敬一は俺の心情を察してくれたのか、素直に了承してくれた。

「よかつた……。お前にはいつも迷惑かけて悪いな。ほんと感謝してるよ。ところで、『デートの相手はどんな人なんだ?』

俺が興味本意で聞くと、田中敬一はまんざらでもない顔で話し始めた。

「実は、私がアイドルプロダクション『わっしょい』で川島君に捕まつた日に、出会った人でね。私がうつかり落とした携帯を届けてくれて、そこから何回か食事に行くようになったのだよ」

嬉しそうに女の話をする田中敬一を見ていると、少しイラッとする自分がいた。俺の恋は前途多難だというのに、何故この老け顔のおっさんがモテるのか皆目検討がつかない。

「末実さんという人なんだが、もとアイドルで、色白美人で、スタイル良くて、やさしくて……」

しかも、相手はもとアイドルの美人だというじゃないか。ハル力ちゃんといい、この男はアイドルにモテる顔なのか？

俺はその後もイライラしながら、田中敬一のノロケ話を聞いた。

「//://しゃあん！ //://しゃあんあん！ 大好きですう～！
本人に会えるなんて、夢見たいですう～！！」

私は先ほどまでの怒りを忘れて、//://さんに抱きついた。においをかいだ。ほおずりした。私が憧れていたアイドルに会えるなんて……！「れ、夢じやないんだよね！？」ああ、幸せ～！

「ちょ、ちょっと……私も、引退していますので、勘弁してください～！ ハルカさん、助けて～！～！」

「良く事情はわかりませんが、とりあえずカエテさん、落ち着いてください。ちゃんと紹介しますから、とりあえず未実さんから離れてください～！」

ハルカが私と//://さんの間に割つて入り、私達は織姫おりひめと彦星ひじめのよに引き離された。この三流アイドルめ！ 邪魔すんじゃないわよ！ 天の川気取りか！ そのまま流されて、アイドル界から消えてしまえ～～！

「あんた～～！ //://さんと知り合～なの！？」

私は、ハルカの//://さんに対する態度が先ほどからあまりにフランクで、気にくわなかつた。//://さんはなあ、お前みたいな三流アイドルが気安く声をかけていいお方じやないんだよ～～！

私はそう思いながら、かなり威圧的な態度で言葉を発した。

「未実さんは、私のマネージャーです」

「はあ！？ マネージャー？ 意味わからないんだけど。ミミさん
はねえ、スーパーアイドルだったのよ。マネージャーなんかするわ
けないじゃない！！ ねえ、やつでしょ？ ミミさん！」

私は、ミミさんがハルカのマネージャーなんかするわけがないと、
心の底から思った。

「わ、私は、ハルカさんの、マネージャーです……」

だから、ミミさんのこの言葉は真実ではないと思った。ミミさん
のことだから、きっと「謙遜なさつているのだから」と思った。

「…………わかった！ ミミさんは、先生なんですね？ ミミさん
は、あえてマネージャーという立場にその身を置き、この三流アイ
ドルにいろいろ教えてあげているんですね…… わすがミミさんで
す！！ こんな三流アイドルに……」

「ハルカさんは三流アイドルではありますん……」

突如、未実さんが店内に響くほどの大きな声をあげた。

「え……え……あえ……」

私は何が起きたのかわからず、呆然とした。

「ハルカさんは、とてもがんばっています。とても素敵な、一流ア
イドルです。どこのどなたか存じませんが、あなたにハルカさんを
否定する権利はありません！」

憧れの人からの言葉といつのは、どんなに些末なことでも心に響く。そこら辺の小僧に真理の極みを説かれるよりも、憧れの人に言われる普通の言葉の方が身に沁みる。

だから、ミミさんの次の言葉に、私の心は酷く揺さぶられた。

「アイドルになつたことがない人に、アイドルの苦労はわかりません。そして、その苦労を知るうともしないで、三流だ四流だと書いているあなたに、アイドルを語る資格はありません!」

ミミさんが言つた何の変哲もない言葉に、私の全てが否定された気がした。

“アイドルを語ることすらできない私は、アイドルになれない”

そう思つと、苦しくなつた。夢をあきらめる恐怖が、体中を襲つた。今まで誰になんと言われようと、搖るぐことのなかつた『アイドルになる』という夢が、今初めてぐらついた。

「あ、ああ、あああ……」

だから私は、この場から逃げ出すことしか、できなかつた。

72・ふけさん（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

カエデさんが消えてから、もう7日経っていた。

「カエデさん……いつたいじく……」

レストラン『でべそ』でカエデさんと歌詞の話をした日以来、急に連絡が取れなくなつた。初めは特に気にもとめなかつたが、さすがに4・5日には心配になり、川島くんに相談した。

川島くんは「できる限りのことはする」と言つてくれた。しかし、今だカエデさんが見つかったという連絡はない。

私なりにカエデさんを捜索しようと思つたが、私はカエデさんの住所もしらなければ、いそなうな場所も皆目検討がつかなかつた。私は、カエデさんについて何も知らない……。それを、あらためて思ひ知らされた。

「カエデさんはいつたいじくいつもりなんだ! 『暗黒豆腐少女』デビューライブまであと3日しかないのに」

カエデさんのことをもつと知りうとしなかつた過去の自分に対する苛立ちもあいまつて、私の心は、怒りにも似たイライラとした気持ちでいっぱいだった。

「もう、機材も手配した。衣裳も準備した。いろんな人にも宣伝した。それなのに、肝心の『暗黒豆腐少女』がいなければ意味がない。全てが水の泡だ!」

「プルルルル！ プルルルル！」

「はい！ もしもし！」

突如、携帯が鳴ったので、私は反射的に電話に出た。私は電話の相手がカエデさんであることを期待した。しかし、携帯から聞こえたのは男の声だった。

「もしもし？ わたくしアイドル研究家の“舞草ひろし”というものですか……」

「ええ！？ ま、舞草さんですか？」

電話の相手はアイドル業界でその名を知らない人はいないといわれる超有名人、アイドル研究家の“舞草ひろし（芸名）”さんだった。

「えつと、『暗黒豆腐少女』について、少し聞きたいのですが……あなた、『暗黒豆腐少女』のマネージャーさんですよね？」

さすがアイドル研究家。まだデビューもしていない『当地アイドル』『暗黒豆腐少女』の情報をすでにゲットして、マネージャーである私の電話番号まで入手しているなんて……すごい情報網だ。

私はアイドル研究家である舞草さんの実力に驚愕した。

「は、はい！ 何でも聞いてください。『暗黒豆腐少女』は最高のアイドルなんです！ きっと、舞草さんも気に入ると思います！！」

これはチャンスだ。舞草さんが推すアイドルは必ず売れるという

ジンクスがあるほど、舞茸さんの発言はアイドル業界において影響力がある。

「……とつあえず、私は舞台上のパフォーマンスを見て、アイドルの魅力を判断します。ですので、『レビュー』ライブが3日後にあると伺つたのですが、詳細を教えていただけますか？」

「は、はい！」

私は終始、頭を下げるながら携帯電話越しに、舞茸さんとの会話を続けた。

「ハル力ちゃん、まだかな」

俺はイタリアン『天使のお零れ』で一人、ハル力ちゃんが来るのをソワソワしながら待っていた。

一週間前に予定していたランチの約束が田中敬一のせいで流れてしまつたので、今日はその“埋め合わせ”といつも田でハル力ちゃんから再びランチに誘われたのだ。

「あ、ハル力さん！　こつちです、こつち！」

数分後、ハル力ちゃんがイタリアン『天使のお零れ』にやつてきたので、俺は大きく手を振つてハル力ちゃんを呼んだ。

自分では昂ぶる感情を抑えていたつもりだが、はたから見たら、ただ嬉しくて無邪気にはしゃぐ子供のようだつたと思う。好きな人に会える嬉しさを隠すなんて、俺には無理だから、しょうがない。

「川島さん、こんにちは」

笑顔で俺にあいさつをしながら、ハル力ちゃんは向かいの席に座つた。

「ハル力さん、この前は本当にすいませんでした！！」

そして俺は、ハルカちゃんが着座するのと同時に、全力で頭を下
げた。

「ハルカさん、Jの前は本当にすいませんでした!!」

私が席に着いた瞬間、川島さんはすく勢いで謝ってきた。

「本当にすいません。わざわざ忙しい仕事の合間に、ランチに誘つていただいたのに……。しかも、ランチの直前に断りの連絡をしてしまい、ほんとうに「めんなさい」。ほんとうならもつとはやくに連絡をするべきだったのですが、ほんとに急な用ができてしまったので……」

「いえいえ、私は気にしないませんので、頭をあげてください。急用では、仕方ありません」

「でも……」

前回のランチを急用で断つたことに罪悪感を持つて、川島さんは私がなだめても、中々顔を上げてくれなかつた。

「ほら、いいかげん顔を上げて! おいしいパスタを食べましょう。ね?」

私は少し、川島さんの“急用”の詳細が気になつたが、あえて聞かなかつた。それよりも、今日は聞きたいことがたくさんある。今日も仕事の合間に時間を作つて来たから、あまり長居できる時間はない。とにかく、川島さんをはやくなだめ、社長さんの情報をたくさん入手しなければ!

そう思つた私は、川島さんの罪悪感を和らげる内容の話をした。

「そうだ！ 聞いてください。実は川島さんが、急用で来られなくなつたおかげで、私に新しい友達ができたんですよ。“カエデ”さんという、アイドルを目指している女の子なんですけど……」

「え！？ カエデー！」

私の“カエデ”という言葉に、先ほどまで頭を下げていた川島さんが急に反応した。私はあまりに急な川島さんの反応に驚き、啞然とした。

「ハルカさん！ その“カエデ”っていう子の住所しらない！？ 実はいろいろと事情があつて、その子を探しているんだよ！」

今から3日前、田中敬一から「“カエデ”という少女を探して欲しい」と頼まれた。田中敬一にはいろいろと迷惑をかけたし、力になつてやりたいと思い、俺は自分なりに“カエデ”という少女を捜索していた。しかし、中々見つけることができなくて困っていたのだが、まさかハルカちゃんから“カエデ”という少女の名前が出てくるとは……世間は意外と狭いものだ。

「あ、えっと……私も知らないんです……」

「何でもいいんだ。別に住所じゃなくても、カエデちゃんの行きそうな場所とか知らないかな？」

ハルカちゃんはかなり困ったような表情で「うーん」と言つていった。ハルカちゃんの困り顔、それは俺が初めて見るハルカちゃんの表情で、とてもかわいらしかつた。他にも、俺の知らないハルカちゃんの表情や仕草があるのなら、その全てを見たい。俺はこのとき、そう思わずにはいられなかつた。

「……あ！ そうだ、事務所に行けばカエデさんの住所、わかるかもしれません。カエデさんも、私と一緒にアイドル『カシユーナツ』のオーディション受けていたんですね。だから、エントリーシートが残っているかもしれません」

「ほんと……？」

「はい、ちょっと待つてください。マネージャーさんに聞いてみますね」

やうに、ハルカちゃんは携帯電話を取り出して席を立った。食事席から遠ざかるハルカちゃんの後姿は、とてもキレイだった。このとき、俺はいつも、夢や恋を追いかけるハルカちゃんの後ろ姿ばかり見ているなあ、と思つた。

ハルカちゃんの後ろ姿は素敵だけど、俺はやつぱり、正面からハルカちゃんを見たい。

俺はこの時、改めてやう思つた。

『……あ！ ハルカさん、ありましたよ。えーっと、"栗山カエテ"さんのHントリーシートでいいんですね？』

電話越しに聞こえる末寒さんの声は相変わらず羣衆がなく、しなびた葉野菜のようだった。

「川島さん、カエテさんのHントリーシートあつたみたいですよ。今マネージャーさんが確認してくれています」

「ほんとですか！？ あつがとうござます」

川島さんはとても喜んでいた。正直、私はいつも川島さんに対して罪悪感を持つていた。

“私は川島さんを利用している”

私はちゃんとそれを理解している。理解した上で、川島さんに期待を持たせて、川島さんの心をもてあそんでいる、最低な女。それでも、いい。最低な女にならうとも、それでも私は社長さんのことをあきらめたくない。だから、川島さんには悪いけど、利用させてもらひ。

……でも、私はまだまだおこちやまで、完全な“悪女”にはなれないで、いつも罪悪感と一緒に生きていく。だから、その罪悪感を少しでも減らしたくて、私は川島さんの手助けをしたいと思つた。川島さんの手助けをして、罪悪感から少しでも開放されたい。許し

てもらいたい……。

私はそんな汚い感情を心に持ちながら、未実さんに話しかけた。

「未実さん、カエテさんの住所を教えていただきたいのですが」

『……すいませんが、それはできません』

「えー? どうしてですか?」

『個人情報ですから……いくらハルカさんといえども、それはちょっと……』

「そこを何とかお願いできませんか?」

『「うーん……もしバレたら大変な」とになりますし……やっぱりでできません……』

「やつですか……」

電話越しでも、とても申し訳なさそうな雰囲気が存分に伝わってきた。未実さんは変にまじめだから、仕方ないかあ。これ以上未実さんに迷惑かけるのも心苦しいし……。

私の心に今度は未実さんに対する罪悪感が渦巻き始めた。

「川島さんすいません。エントリーシートはあつたんですけど、住所は個人情報なので教えられないそうです……すいません、力になれなくて……」

私は川島さんに向かつて頭を下げた。川島さんの力になれなかつたことは残念だし、罪悪感も多分に残つたままだけど、しょうがない。ここは気持ちを切り替えて、社長さんの話をしよう。また何の見返りもなしに川島さんを利用することになるけど、罪悪感は雪達磨式に増える一方だけれど、私の想いはそれ以上に強いの。時間もないし、はやく社長さんの情報を川島さんから聞き出そう。

私はそんなふうに気持ちを切り替えようとした。しかし、川島さんの次の言葉で、私の気持ちは大きく変化してしまい、うまく切り替えることができなかつた。

「じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じやなくて………社長なんだよ」

『カエデちゃんの住所わかつたぞ。×町3丁目にある一軒家にすんでいるそうだ。そこにカエデちゃんがいるかどうかわからんが、行ってみるといい』

私は川島くんからのこのメールを見て直ぐに、家を飛び出した。そして、タクシーをつかまえて、急いでカエデさんの家に向かった。カエデさんには、言つてやりたいことが山ほどある。

“何で私に断りなく、いなくなつたんだ！”

“何で連絡の一つもよこさないんだ！”

“心配したんだぞ！”

“君は一人でアイドルをやつているんじゃないぞ！”

“いろんな人の力を借りてることを忘れるな！”

次々と浮かんでくる言葉。この言葉達を、怒りにも似たこの感情に乗せてぶちまけてやるつー！

私がそんなことを考えてこるついで、タクシーはカエデさんの家の前に到着した。

「ピンポーンー！」

「…………」

タクシーから降りて直ぐ、カエテさんの家のチャイムを鳴らしてみたが、反応はない。留守なのだらうか？

「ピンポーン！ ピンポーンピンポーン！」
「カエテさん！ いるなら返事して！」

何回もチャイムを鳴らしたが、相変わらず反応はない。やはり、今は誰もいないのだらうか？

私はそんなことを思いながら、試しにドアノブを回してみた。すると、すんなりと回った。ビックセラ鍵は開いているらしい……。

「おじやまします……」

私は忍び足で家の中へと潜入した。これはいわゆる“不法侵入”といつやつだが、仕方がない。カエテさんのアイドルデビューの夢を叶えるために、“法”には少し目を瞑つてもらおう。

家の中はいたつて普通だった。ビックセラもある中流階級の家を想像してもうえれば、大体あつているだらう。

「カエテさん？ ビックセラの？」

私はとつあえず2階から探そうと思ひ、階段を上った。

「……ここか」

階段を上つて直ぐの部屋の扉に『カエテ』という表札がぶら下がつているのが見えた。

【ふけさん……『ぬん】

さらに、扉の向こうから、ボソボソとしたしゃべり声も聞こえた。その瞬間、私はカエテさんがこの部屋にいることを確信し、それと同時に感情が昂ぶつた。

「カエテさん！ 何でいなくなつたのーー！」

私は昂ぶつた感情に任せて、カエテさんがいるであらひの部屋のドアを勢いよく開けた。

私は自分の部屋に「田間あつ」と引きこもっていた。そして、アイドル『クリスタル』の『//』さんについて、いろいろと考えていた。

私がアイドルに興味を持つきっかけとなつたのは、古いアイドル『クリスタル』の『ミミ』さんだつた。テレビの向こうに住む、美しい女性に、当時7歳の私は純粋に憧れた。

“憧れ”的エネルギーはすさまじいもので、小学生の私はお小遣いを必死にためてCDやアイドル雑誌を買いやさつた。ミミさんが出演したテレビ番組を全て録画した。毎日ミミさんのことを妄想した。毎日ミミさんにファンレターを送つた。その枚数は日に日に多くなり、最終的には100枚にわたる濃密なファンレターを送つた。ミミさんと同じ服が着たくて自分で作った。そして、その継ぎはぎだらけの服を着て学校に通つた。

これは、ただ純粋にミミさんなことをもつと知りたいと思つての行動だが、周りから見れば少しおかしな子だつたかもしれない。今振り返るとそう思つ。

そんな、私の憧れであるミミさんが、とあるインタビューでこんなことを言つていた。

【私はアイドルとしてほんとうに未熟者です。私一人ではここまで来ることはできませんでした。私のことを見つけてくれたみなさん

に、とても感謝しています】

幼い私はこの言葉を聞いて『本当のアイドルは、何もしなくても誰かが見つけてくれるものなんだ!』と思つた。このとき、ミミさんの【私のことを見つけてくれたみなさん】という言葉が、幼い私の心中に深く突き刺さつたのだ。

その日以来、私は心の底から純粋に、自分もアイドルになれると思った。盲目的に、たいした根拠もないのに、幼い私はアイドルになれる信じて疑わなかつた。

しかし、現実は厳しいもので、何もしないで日々を過ごしていたところでアイドルになれるはずもなかつた。だから私は高校入学を期にアイドルオーディションを受けるようになつた。誰も私のことを見つけてくれないのは、私が少し見えにくく所にいるからだと思つ、「しょうがないから、私のほうからオーディションに出向いてあげるわ」という気持ちで最初はオーディションに参加した。

私を見た瞬間、「おお! 君は金の卵だ! 今すぐアイドルとしてデビューしなさい!」と言われるだろうと思ひながら受けた、最初のオーディション。結果は惨敗だつた。

歌唱審査、ダンス審査、自己表現。全てにおいて他の子のレベルが高くて、私は群を抜いてへたくそだつた。そのあまりのへたくそに、私の審査のときに他の参加者の子が笑つていていた。終いには、審査員の人まで、私のへたくそなダンスを見て笑つていた。私は自分があまりにも場違いな存在であることを肌で感じ、恥ずかしい気持ちでいっぱいだつた。すゞく、惨めだつた……。

この初オーディションでの失敗以来、私は必至でダンスや歌の練

習をした。毎日毎日必死で努力した。私は自分の魅力が足りないからオーディションに落選したのだと思い、その魅力を磨くために努力をした。

でも、本当は違った。私の努力は自分を磨くためのものじゃなくて、アイドルとしての素質が1%もないちっぽけな自分を、隠すための努力だったんだ。

『アイドルになったことがない人に、アイドルの苦労はわかりません。そして、その苦労を知りうともしないで、三流だ四流だと言っているあなたに、アイドルを語る資格はありません!』

あの日、イタリアン『天使のお零れ』でミミさんが私に言つた言葉は、私が必死に身にまとつてきた努力を簡単に剥がした。そして、何もまとうことのない、ちっぽけな私という存在と無理やり向き合わされた。その、ちっぽけな私は、あまりにも普通で、全然輝いていなくて、どうしようもないくらい地味で……見たくなかった。

何にも持つていらない自分”と向き合つのは、すごく怖かつた。体中が震えた。だから、あのとき私は……逃げることしかできなかつた。

「ふけさん……『めん』

何故か、ふけさんに対する謝罪の言葉が口から出でてきた。

“ふけさん、『めん”

私があらためて心の中でそう思つた瞬間、急にドアが勢いよく開いた。

「カエデさん！ 何でいなくなつたの！！」

開けた扉の向こう側には、怒った表情のふけさんがいた。

「カエーテさん！ 何でいなくなつたの…… わすがの私も怒る…… よ……」

私は勢いよくカエーテさんの部屋に入った。怒鳴つてやるつもりだった。でも、ベッドの上で、小さく体育座りをしているカエーテさんを見た瞬間、怒りはどこかへ消えてしまった。

「ふけ…… わん？」

そこにいたのは、まだ幼い、少女だった。

私はいつの間にか、カエーテさんは強くて立派な女性だと思つようになつていた。でも、それは違つた。カエーテさんはまだ、か弱い少女のままだつた。

ここ最近、いろんなことが少女の身に降りかかつた。少女はオーディションに落ちてふてくされ、私にファーストキッスを奪われ激怒し、アイドルとしてデビューできることに胸躍らせ、今まで挑戦したことのない作詞に悩み、生臭い豆腐を食べることに我慢をした。

そんな、あまりに急激な変化に耐えられず、どうしようもなくなつて、ただ途方に暮れるしかない少女。

「カエーテさん」

そんな少女を見た瞬間、私は何故かカエーテさんの名前を呼んだ。

よくわからぬ「ナビ」、“カエテ”といつ響きが、心のどこかにもなく
愛しくて、頬に染み出すにはいられなかつた。

「カエテさん……」

「の言葉を呴いた瞬間、私の心に一つの感情生まれた。ああ、この感情はいつたいどこから来たのだろう？ はがゆくて、暖かくて、激しくて、ドキドキして、甘くて、ぐちやぐちやで、それでいて静寂のよみに穏やかで……。

“愛しい”ではあらわしきれない、なんとも言えない感情が、私の心を支配した。そして、この感情は心だけではなく私の体まで支配した。支配された私の体は、最短の動きで、カエテさんを、やさしく、強く、抱きしめた。

「のとき、私は自分の気持ちに気付いてしまつた。私は、カエテさんのことだが……好きだ。

『じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じゃなくて……社長なんだよ』

俺は、何であんなことを言つたのだろう? 田中敬一の力になりたかったから? 違う! 確かに田中敬一の力になつてやりたいとは思つていただけ、ハルカちゃんに無理を言つてまで力になつてやりたいとは思つていなかつた。じゃあ、なんで? なんでわざわざ“社長”という言葉を使って、ハルカちゃんに「カエデという少女の住所を教えて欲しい」と頼んだんだ?

……わかっている。わかっているんだ、ほんとうは。俺はただ、憎かつただけ。目の前にいる俺じゃなくて、どこか遠くにいる社長のことばかり見ていいハルカちゃんが、憎くてしようがなかつたんだ。だから、“社長”と“マネージャー”を天秤にかけさせて、ハルカちゃんを困らせて、憂き晴らししてやるつと思つたんだ。

でも、ハルカちゃんにとって“社長”という言葉は、ただの言葉じゃなかつた。

『じ、実は……そのカエデっていう少女を探しているのは、僕じゃなくて……社長なんだよ』

この言葉を聞いてからのハルカちゃんは、ほんと、笑っちゃうくらい別人だつた。

“社長さんのためなら”

そう思つた瞬間から、ハルカちゃんの行動力・会話力は跳ね上がり、体中からエナジーが溢れていた。そして、ものの数分で、あれほど電話越しに渋つっていたマネージャーから、カエテという少女の住所を聞きだした。

そんな恋の力のすさまじさを目の当たりにして……『完全に負けた』、そう思つたよ。

『あ！　もう時間だわ。私次の撮影があるので、そろそろ失礼します』

『……ハルカさん、今日はありがとう。すじぐ、楽しかった』

『私もです。またランチ、ご一緒に締しましようね』

『……ハルカさん、これ』

『これは……？』

『社長さんの……いや、田中敬一の連絡先』

『え？』

『これからは、僕を介する必要はない。直接、田中敬一と連絡を取るといいよ』

『えつと.....三畳あん?』

『あねじゅ、あむだい』

81・カエテ（前書き）

各話のタイトルの人物がその話の主人公となります。話ごとに主人公がかわりますので、少し読みにくいかも知れませんが、ご了承ください。

明日は、『暗黒豆腐少女』の「トビューライブ」だ。だめだ、ドキドキしそうで、眠れそうもない。

私は心の底からふけさんに感謝したい。ふけさんのおかげで、立ち直ることができた。ミミさんの言葉は、痛かった。辛かった。アイドルになるという夢を、あきらめようと思った。7日間家でひっこもっている間に、私の夢への活力は、完全にゼロになっていた。

でも、ふけさんにやさしく抱きしめられたとき、もう枯渇したと思っていた活力が沸いて来た。私はこの活力がどこから来ているのか、そのときはわからなかつた。でも、今ははつきりとわかる。この力は、ふけさんの力だ。

今まで私は、一人で『アイドルになる』という夢を掲げ、一人でその夢を背負つて歩き、一人で折れそうな心を支えてきた。でも、今は違う。今は、ふけさんがいる。ふけさんと一人三脚で夢を掲げることができる。二人で夢を背負うことができる。私が夢の重圧に負けて、支えきれないときは、ふけさんが支えてくれる。それを知つていてるだけで、私は強くなれた。

結局、夢と本気で向き合う瞬間つていうのは、人は一人だ。一人の力のみで夢に挑み、一人の力のみを評価され、一人の力のみで夢と向き合う恐怖と戦わなければいけない。でも、そんなとき、誰かの支えがあつたら人はものすごい力を發揮できる。心を支えてくれる他の誰かがいるだけで、一人の力は何倍にも膨れ上がるんだ。

ふけさんはそれを言葉ではなく、抱きしめる」とで教えてくれた。もひ、大丈夫。私は絶対にブレンない。アイドルになる。もひ、立ち止まらない。

『デビューライブ前夜、私がこんな感じで自分自身を鼓舞していると、ふけさんからメールが届いた。

『カエデさん、明日のデビューライブがんばってください。それと、ごめんなさい。実は、明日のデビューライブに私はいけません。ほんとうはもつとはやく言つべきだつたのだけれど、今日まで言えませんでした。』『めんなさい。とにかく、私は明日、君の傍にいてやれないけれど、私の心は君の傍に置いていくつもりです。だから、明日のデビューライブ、思う存分暴れてください。健闘を祈ります』

正直、ふけさんが明日のデビューライブに来られないこと、ショックだった。でも、ふけさんは『私の心は君の傍に置いていく』という言葉をくれた。私にとって、それだけで十分だ。その言葉だけあれば、あとは自分の力でステージに立てる。だから、ふけさん安心して。私、大暴れしてくるから！

私はそんなことを考えながら、ふけさんに返信のメールを送った。

明日は、『暗黒豆腐少女』の『ビューライブ』だ。そして、ハルカとかいう女と『デート』しなければいけない日だ。

ああ、私はまた、カエデさんがアイドルとして成長する『瞬間』を見逃してしまったのか……。

そう思つと、悔しくて、歯がゆくて、心が揺れた。やっぱり明日の『デート』は断りうか……。何度も思つたが、川島君の男泣きを思い出すと、どうしても断りのメールを送ることはできなかつた。

私がそんなことを考えていると、メールが届いた。

『こんなにちは。突然のメールごめんなさい。私、ハルカと言つ者です。川島さんからメールアドレスを教えていただきました。この度は、無理を言つてしまい、申し訳ありません。社長さんがお忙しいことは重々承知しております。でも、私、どうしても社長さんに会つてお礼を言いたかつたんです。明日、私はとても楽しみにしております。社長さんも、楽しんでくれたら嬉しいです。おやすみなさい』

ハルカ……か。少し“カエデ”と音が似ているなあ。でも、全然違う。“ハルカ”と何度も呟いても、心に響くものは何もない。でも、“カエデ”という響きには、愛しさが含まれていて、呟くたびに私の心はふわふわしてしまつ。

ああ、私はやはり、少しでもカエデさんの傍にいたい。これはわ

“ がままだらつか？ ”

“ 川島君との約束 ”

“ 何故か私とのデートを楽しみにしているアイドルの心 ”

「 一つを破るような行為をしてまで、私のわがままは存在していいのだらつか？ 」

『 力ヒテさんの傍にいたい 』 という気持ちとの葛藤。その葛藤が導き出した答えは、私のメールに込められた。

『 私も、ハルカ君と会えることを楽しみにしています。ちなみに、明日のデートのことですが、商店街でお祭りがあるので、そこに行くところのまじうどうか？ 』

明日、商店街のお祭りで『 暗黒豆腐少女 』 のデビューライブが行われる。商店街でデートをすれば、力ヒテさんの傍に近づける。それでいて、川島君との約束も果たせる。

ああ、私はなんとズルイ男なのだろうか……。今夜は血口嫌悪で、眠れそうもない……

明日は、社長さんとの待ちに待つたデートの日だ。楽しみ。ウキウキすぎて、眠れそうもない。

明日、何かが変わる。それは“関係性”なのか、それとも私の“心”か、はたまた私の“未来”かもしれない。とにかく、他の人にとつて取るに足らない一日かもしない。でも、私にとつて明日のデートは、天地がひっくり返るような、劇的な、ターニングポイントなの！ 理屈とかそんな陳腐なものじゃなくて、直感的に、確信できる。

私がそんなことを考えていると、社長さんから返信のメールが届いた。

『私も、ハルカ君と会えることを楽しみにしています。ちなみに、明日のデートのことですが、商店街でお祭りがあるのですが、そこに行くところはどちらでしょうか？』

“ハルカ君”だなんて……うれしくて死にそう！ それに“楽しみにしています”だつて。社長さんも楽しみにしててくれたなんて……ああ、胸のトキメキが止まらない！！ 心臓の拍動がどんどん激しくなっていく。もづ、これは病といえるくらい、胸が苦しい！

私は痛む胸を押さえながら、ウキウキ気分で社長さんに返信のメールを送った。

『商店街のお祭り、ステキです！ 楽しみです！！ 楽しみすぎて

胸のドキドキが止まりません！――』

メールを送つて十秒後、改めて送つた文章を見て、私は後悔した。ウキウキ感情が文章に表れすぎている。社長さんに変な子だと思われなければいいのだけれど……。

そう思うと、気持ちが落ち着き、私は少し冷静になつた。そして、冷えた頭で明日のデートについてもう一度深く考えた。準備は大丈夫だろうか？ 財布はカバンにいれた？ ハンカチーフは？ 着ていくものは？ ……商店街でお祭りということは、浴衣を着ていつたほうがいいのかしら？

私はあまりにも気持ちが不安定で、どうしたらいいのかわからず、誰かに相談したいと思つた。このとき、一番に思い浮かんだのは……川島さんだつた。

「川島さん、まだ起きているかしら？」

私はそんな小言を呴きながら、川島さんにメールを送つた。

明日は、ハルカちゃんと田中敬一がデートする日だ。……だからなんだつて言うんだ。俺には関係のないことだ。

俺はそういう思いながらも、何故かソワソワして、寝付けずについた。そんな夜中、一通のメールが届いた。

『川島さん、こんばんは。夜分遅くにすいません。実は、明日社長さんと商店街のお祭りに行くことになったのですが、浴衣を着て行った方がいいと思いますか？ それはハリキリすぎでしょうか？ いつもどおりの私服の方がいいのでしょうか？ こんなこと、相談できるの、川島さんしかいなくて……』『めんなさい』

……はあ？ なんだよこのメール……！
今何時だと思つてんだよ……！ もう、俺にメールする必要なんてないのに、なんでこんなくだらない内容のメールをよこすんだよ……！
！ 浴衣？ 私服？ どーでもいいだろ……！ そんなこと……『……』
……『めんなさい』つてどういうことだよ……！ なんで謝るんだよ……！
…… 謝るくらいならメールするんじゃねーよ……！ ちくしょう！ ちくしょう！ ちくしょうちくしょう……！ ちくしょう……！ ちく

よ。こんなにイラついているのに、こんなに憎いのに、なんでもまだ、好きなんだよ。なんで、嫌いになれないんだよ……！ こんちくしよ……！

明日は、『当地アイドル』『暗黒豆腐少女』のデビューライブか
いったいどんなアイドルだろうか？ やはり、既存のアイドルについてグダグダと語るより、新しいアイドルを発掘する方がおもしろい。金にはならないが、『新人アイドルを発掘する』というライブワークだけはやめられない。

私にとってアイドルとは“人の心を掴む者”であり、細かい特徴や能力差はあるうとも、結局“心を掴まれるかどうか”ということが、アイドルの良し悪しを判断する規準となる。

さて、『暗黒豆腐少女』は私の心を掴んでくれるだろうか？ 楽しみだ。

私はそんなことを考えながら、徹夜でコラムの記事を書き上げた。

本日は晴天で、季節は夏。

暑さと蝉の声が入り混じり、夕刻の空に波打つ。

赤と黒が入り混じる空には、もう星が輝いている。

そんな星が見下ろすのは、眼下にうねる人の川。

今日は祭り。

歓喜の集い。

そんな祭りの熱氣は空へとのぼり、恐ろしい入道雲が世界に広がる。

そんな世界は今日も平和で、今日も残酷だ。

そして銀河は、今日も綺麗に澄んでいる。

そんな銀河以上に、彼女の瞳は澄んでいて、私は思わず瞳の奥のブラックホールに引き込まれた。出合つて数分で、私は心を掴まれそうになつた。

あぶないあぶない……。さすが一流アイドル、これは惚れてしまう川島君の気持ちがわからんでもない。私も、カエデさんより先に出会つていたら、心を奪われていたかもしけない。

そう思えるような、素敵なかいだる。それが、私がハルカ君に出
会つて最初に抱いた感情だった。

まるで熱帯夜にじびつつて蟬の声のみひこ、心音が耳に鳴り響く。

ドキドキが体中に波打ち、足が震える。

そんな、立つていろだけせこばつこの足で、私はあなたを待つていた。

今日は祭り。

じぎわいの人波。

セコハラヒニ笑顔があふれてい、セコハラヒニアマガ生まれてい
た。

そして、愛やじめやうやうが、まるで温泉の様に垂れ流しにされて
いる。

私は、愛とか喜びとか、そういういたドラマチックな要素を多分に
含んだものは、もつと希少価値の高いものだと思つていたけれど、
どうやらセコハラヒニ転がつているものらしい。

だって今日、それが私の手にも入るのだから。

こんなに身近に私自身がそれを感じているのだから、間違いない。

私がそんなことを考えてみると、社長さんがノロノロとやってき

た。

「やあ、ハルカ君。遅れですまないね」

社長さんの声を聞いて、顔を見て、何度も何度も思い描いた”存在”を感じて、私の体中の血液が沸騰した。

ボカーン！ ブクブク！ ドガーン！ 見たいな感じ。

なんていうか、そんな抽象的で幼稚な表現が最もふさわしいような感情。それが私の体を行つたり来たり。ああ、顔が熱い。ほてりが冷めない。心臓もさらにギアを上げた。

私は今日一日、このまま意識を保ち続けられるかしら？ そう、不安に思えてしまうほど、私の心と体は“恋”という暴れん坊に荒らされていた。

祭りの夕闇。

行きかう人々は、内なる熱気を好き勝手に空へと放散している。

それはもつ、地球温暖化などおかまいなしといつほどに。

そんな中、俺一人だけが内なる熱気を放散することができず、悶々とした熱を、ただこの身に溜めることしかできなかつた。

結局、俺はハルカちゃんと田中敬一のデートが気になり、商店街の祭りに来てしまつた。はあ……、情けない。俺はこんなちっぽけな体一つ、コントロールできないなんて。

俺はそんなことを考えながら、まるで野獣のよつて青春を熱氣に変えて、その熱エネルギーでうごめく群衆の中を歩いていた。

商店街の小さな祭りとはいえ、この狭い空間に千を超える人々が集まつている。これほどの人の中から、ハルカちゃんを見つけることができるだらうか？ 別に見つけたところで何があるわけでもない。むしろ、見つけないほうが俺にとつて良いことなのだろう……

俺はそんなくだらないことを考えながら人波を漂つていたが、数秒後、その考えは杞憂に終わった。

「あ……」

人波を外れて一人、木の下でたたずむ浴衣姿の美しい女性。俺は一目でそれがハルカちゃんだと認識し、その瞬間周りの景色は消え落ちた。そして、ハルカちゃんだけが俺の瞳に残つた。

夜の空。

星達が自己主張合戦を繰り広げる。

どの星も、かなしいくらい輝いていて、ついやましかった。

今日は祭り。

熱気の集い。

そんな熱気の正体は、夢か青春かはたまた幻か。

唯一つ自信を持つて言えるのは、今この瞬間、最も激しく熱気を放つてているのは、この私。

無尽蔵に吐き出される私の熱気は、人の心に火をつける。

そして、心の燃えた人々は、まるで蒸氣機関車のようにせりなる熱気を発散する。

発散された熱気は、一人では寂しいらしく、寄り添い、かたまり、まるで孤独な人々のようにモクモクと世界に広がる。

そして、地球という大きな箱に充満した熱気は大気圏を突破し、宇宙の果てへと到達する。

その瞬間、私は宇宙と一つになる。

当然、宇宙と一体化した私に怖いものなどあるはずもなく、あるのは満ち溢れる自信と熱気、そして少しのドキドキだけ。

わあ、行け!

あのステージに向ひ。

私はそんなことを考えながら、ステージに続く階段を駆け上がったのだけれど、このとき、左手で強く握り締めたマイクだけが小刻みに震えていたことに、私自身気が付いていなかつた。

アイドルとは、それ即ち“エネルギーの塊”である。

あの小さくて華奢な肉体に、いったいどれほどのエネルギーが溜め込まれているのか、眞田見当がつかない。

おそらく、ビッグバンよりも強大なのだろう。

アイドルの輝きよりも、こんなちっぽけな宇宙を生み出すことしかできなかつたエネルギーの方が、強いはずがない。

そんなの生まれたばかりの赤ん坊でもわかることだ。

頭の固い大人には、一生かかつてもわからないだろうがな。

これがどんなに難しい数式を見つけることよりも価値があるということに、目の腐つた人間は何故か気付けない。

いや、気付いているのだろうけれど、それを認めたくないのだろう。

彼女達が笑えば、それ即ち幸せであり、世界はそれだけで平和なのに、そんな単純なことに価値はないと決め付けているのだ。

何？”笑顔”だけじゃ平和になれない？　お金がなければ誰も救えないって？

そんなんのはただの後付さ。

だって、彼女達はお金を持つていなければ、その身に秘めたエネルギーのみで、人々を動かせる。そして、彼女達に動かされた人々が、世界に平和をもたらしているのだから。

きっとこの世にお金が存在しなくても、彼女達は歌い、踊り狂い、エネルギーを流し続けるだろう。そして、そのエネルギーを受け取った人々は、お金がなくても世界を平和にするだろう。

人の本質は、エネルギーなのだよ。

お金は一番わかりやすい手段でしかない。

それを、アイドルは私に教えてくれた。

だから私は、アイドルのエネルギーを少しでも多くの人に伝えたい。

私はアイドルから貰ったこのエネルギーを使って、世界平和を実現したいんだ。

そして世界平和を実現するために大切なのは、お金を集めることじゃなくて、人を動かすこと。

世界平和にお金が必要ならば、自分がお金を集めるんじゃなくて、裕福な人に払わせればいい。

合理的でしょ？

そして、それを実現するのは人のエネルギーであり、その最たるもの

のが、アイドルなのだよ。

そんなエネルギーを持ったアイドルがたくさんいれば、それだけ世界は平和に近づく。

だから私は今日も新たなアイドルを求める。

『暗黒豆腐少女』デビューライブ。

今日もまた、世界を平和にするアイドルが一人、産声を上げる。

肩と肩の距離、おおよそ10センチ。なんともぎこちない距離だ。初対面の一人としては近すぎる。だが、このたくさんの人波を一人別れないよう歩くには、この距離を保つしかない。我慢しよう。

私はそんなことを考えながら、きっと他の誰かがそこにいられることを悲しいほど望んでいるであらう、ハルカ君の左隣を陣取り、祭りの人波を闊歩した。

「…………」

ハルカ君と出会ってから、もつすでに10分くらいたつただろうか？おたがい、ずっと沈黙したままだ。ああ、何とも居心地の悪い空間だこと。息が詰まりそうだよ。ハルカ君がいろいろと話をしてくれるもんだと思っていたから、何も話題を用意していない。確か川島君の話では、相当私とのデートを楽しみにしていたはずなのに、なんでさつきから下を向いて黙っているんだ。はたから見たらすぐくつまらなそうだよ、ハルカ君。君はそれでもアイドルかい？アイドルならもつとうまく表現をしてくれないと、伝わらないよ。誰の心も動かせないよ。さあ、私と最初に会ったときのような飛び切りの笑顔で楽しいおしゃべりをしておくれよ。私は愛しいカエデさんのデビューライブを我慢して、君に付き合っているんだよ。君は、気まずい雰囲気を私にプレゼントするために、私の貴重な“瞬間”を奪つたわけではないのだろう？

カエデさんのデビューライブが近づくとともに、私のハルカ君に

対するイライラが少しづつ増えてきていた。そんな時、

「ピロピロピロン ピロピロピロン 」

ハルカ君の携帯が鳴った。

「あ、す、すいません……」

ハルカ君は申し訳なさそうに、アタフタとした動きでカバンから携帯電話を取り出して、画面を確認した。その瞬間、

『本日のメインイベント、『暗黒豆腐少女』のライブが10分後になります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください!』

というアナウンスが流れた。そのアナウンスを聞いた人の川は、物珍しさに釣られたのか、中央広場へ向かって動き出した。私はいつもたつてもいられなくなり、その川に乗つてカエテさんのもとへと向かおうとした。そのとき、

「もげえ！」

何者かに服の襟元をものすごい力で引っ張られ、中央広場へと向かう人の川から引き離された。

「ぐ、ぐるぢい」

私は襟を引っ張られ首が苦しかつたので、直ぐに後ろを振り向いて、襟を引っ張る手を振り解いた。

「ちょっと！ いきなりなにすんの！？ 苦しいじゃないか！」

私がそう、怒鳴りながら振り向くと、そこにはハルカ君がいた。どうやら、私の襟を引っ張っていたのはハルカ君だつたらしい。華奢なのに、すごい力だ。

「『めんなさい』……」

ハルカ君の目には、涙が溢れていた。ハルカ君は何度も何度も頭を下げる謝った。そのたびに、大粒の涙がぼつたんぼつたんと落ちていた。

「いや、その……わかればいいのだよ……わかれば……」

私はハルカ君の涙に動搖してしまい、困ってしまった。

「ほ、ほら。今日はせっかくの祭りなのだから、楽しもう。祭りに涙は似合わないよ。ほら、顔を上げて」

私はハンカチーフを差し出し、なかば強引にハルカ君のうつむく顔を上げた。その瞬間、ハルカ君と目があつた。

「私、社長さんにずっと会いたかったんです！ 私がアイドルになれたのは社長さんのおかげなんです！！ 社長さんの好きなものは何ですか！！！ 今日の私の浴衣姿どうですか？ 似合っていますか！？ アイドルに大切なものは何ですか？ 私今すごくドキドキしています！ こんビライヴに来てください！！ もっと社長さんのこと知りたいです！！ 今お付き合いしている人はいるのですか！？ 私みたいなお子様は嫌いですか！？」

そして、ハルカ君は間をあけずにものすごい勢いでしゃべりだした。その言葉達は、まるで壮大で純粹な流星群の様に、祭りの闇夜を流れた。

「何をやっているんだ！ バカタレ！！」

念願の社長さんを前にして、ただうつむくことしか出来ないハルちゃんを少し離れた所から見て、俺は思わずそんな暴言を呴いた。

ハル力ちゃん、今こそ勇気を出すときだろ！？ 今君の目の前には、幻想じゃない社長さんがいるんだよ。世の中にはどんなに望んでも、幻想にしか恋できない人だつているんだよ。臆病で、悲しいほど人を想い過ぎで、好きな人に会うために、好きな人の所へ向かう一歩すら踏み出せない、そんな人間だつているんだよ。

でも、君は違うだろ？ 君は臆病者じゃない。ちゃんと「社長さんにお会いしたい！」と表現できていたじゃないか。ちゃんと行動したじゃないか。幻想だけじゃなくて、現実と向き合おうとしたじゃないか！ 君は素敵だよ。自信を持つて。さあ、表現するんだ。へたくそでもいい。大切なのは、表現しようとする姿勢であり、表現せずにはいられないほど強大な心のままに生きるということだよ。

「ハル力ちゃん、がんばれ！」

俺はそんな小言を呴きながら、気がつくとメールを打っていた。

『ハル力さん、大丈夫。きっと、うまくいく』

たつた一行のメール。それだけで十分だと思った。今ハル力ちゃん

んに必要なのは“きつかけ”であり、変に悟ったような俺のクソみたいな言葉は必要ない。

俺がそんなことを考えていると、祭りの空にアナウンスが流れた。

『本日のメインイベント、『暗黒少女』のライブが10分後に始まります。みなさん、中央広場特設会場へ、ぜひいらしてください!』

…………ほひ、やつぱりそつだ。ハルカちゃんは、強い子だ。

俺のメールがきつかけだつたのか、それともアナウンスがきつかけだつたのかわからないけれど、まるで崩壊したダムのようにしゃべりだしたハルカちゃんを見て、俺は安心した。それと同時に、胸が少しグッと掴まれたような感じがして、苦しかった。

「私は、社長さんにずっと会いたかったんです! 私がアイドルになれたのは社長さんのおかげなんですよ!! 社長さんの好きなものは何ですか!!!! 今日の私の浴衣姿どうですか? 似合っていますか!?’

ああ、ハルカちゃんの表現は何てへたくそなんだろう。あんなに勢い良くしゃべつても、何言っているんだか全然わからないよ。君はきっと、君の心にある感情を表現する術を知らないんだろう。それでも、どうにかして表現しようとすると、そのすごく一生懸命な姿は、きっと誰かの心を打つだろう。そんな君に比べて、俺は……俺は…………臆病者だ。

俺は、ちゃんと表現しなかつた。俺はきっと、この心の中にある感情の表現方法を知っている。若いハルカちゃんよりも、もっと巧みにこの感情を人に伝えることが出来る。それなのに……俺は表現

しなかつた。何度も何度も何度も、チャンスがあつたのにしなかつた。俺は……俺は……。

こみ上げてくるのは、臆病な自分に対する、失望感だけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6779x/>

カシューナッツはお好きでしょうか？

2012年1月8日21時48分発行